

PROLOGUE

一つの大陸があった。

居住者は魔族ばかり。人間や妖精ようせいからは「暗黒大陸」と呼ばれ、恐れられていた。とある有力魔族が、この大陸を完全に支配し、ヴィスガルド魔王国を建国した。こうして、初代魔王が誕生した。

満を持して、彼は世界征服に乗り出す。

人類や妖精族が住む大陸への一大侵攻を開始したのだ。だが、世界征服という大願も虚しく、彼は戦時中に大往生を遂げた。享年四九九。魔王といえども、病には勝てなかった。

初代魔王は七十二名の子を儲もろけていた。

血で血を洗う王位争奪戦が繰り返された結果、とある王子が生き残った。宮廷のだれ一人として、その結果は予想していなかった。

なぜならば、彼の王位継承順位は七十二位。



レベル0の魔王様

異世界で冒険者を始めます

史上最強の新人が誕生しました

先行試読版

実に、最下位からの成り上がりだった。

——二代目魔王の名は、イシユヴァルト・アースレイ。

闊達な性格で知られ、周囲からは「イシユト」と呼ばれることを好んだという。

即位式において、彼は早速、己の能力を見せつけた。

景気づけに、夜天に煌々と輝く満月を砕いてみせたのだ。

暗黒属性の、超長距離攻撃魔法であった。

この世界の月は三つあり、それまでは「三連月」と呼ばれていた。その一つをイシユトが砕いたことで、以後は「双子月」と呼ばれるようになった。

即位式もそこに、新魔王イシユトは公務に就いた。

亡父が始めた戦争は、いまなお続いていたのである。

最初のうち、彼が立案した作戦の数々は大当たりし、魔王軍は怒濤の進撃を果たすことになる。

だが、人類側も愚かではなかった。以前は同族同士で醜い争いを繰り返していたのだが、いざ「魔王軍迫る！」の急報が響きわたるや、一致団結を果たしたのだ。

戦況は膠着した——。

そんな折、とある「勇者パーティー」が魔王城に潜入した。

彼らは、全三十三層に及ぶ魔王城を地道に攻略し、ついには最上層に到達。

かくして、魔王と勇者による一大決戦が始まった。

ヒューマン、エルフ、ドワーフ、そして伝説級の魔法使い……世界各地から集められた勇者たちは手強く、さすがの魔王イシユトも追いこまれてしまう。

「光栄に思うがいい。この姿を見せるのは、貴様らが初めてだ」

イシユトは厳かに宣言した。

見る見るうちに第二形態へと移行する。全身が巨大化し、背中から漆黒の翼が生えた。下半身は人型から竜型へと変異を遂げた。あたかも、巨人の上半身と大型竜の下半身を接合したかのような、禍々しい姿が現れた。

常人ならば、じろりと睨まれただけで魂を抜かれてしまうだろう。

身のほど知らずな勇者どもを一網打尽にすべく、魔王イシユトは反撃を開始した。

無数の触手による、連続攻撃にして全体攻撃。

暗黒属性を主体とする攻撃魔法。

あらゆる状態異常を付加する眼術。

あらゆる支援魔法の効果をネチネチと解除する特殊攻撃。一定時間が経過すると、問答無用で相手を殺す呪術。

さらには、悪鬼の群れを大量に召喚し、鉄壁の布陣を構えた。それでも勇者たちは倒れなかった。

伝説級の武器や最上位の魔法、そして華麗なチームワークで対抗したのだ。まさしく疾風怒濤しふうどとうの攻防が繰り返り広げられた。

いつしか、イシュトが召喚した悪鬼たちは全滅していた……。

ここに至り、魔王イシュトは心を決める。

いまこそ「奥の手」を使うときだと――。

それは、まだ一度も試したことのない最終奥義。

彼自身にも、なにが起こるのかはわからない。

もしかすると、この暗黒大陸を丸ごと消滅させてしまつかもしれない。

それでも、やらねばならぬ。

魔王の辞書に「敗北」の文字はないのだ。

「忌まわしき勇者どもよ、刮目かつもくして見よ――」

いよいよ最終奥義を使うべく、イシュトが「うおおおおおっ！」と氣力を振りしぼっていった矢先のことだった。

ずっと後衛で待機していた魔法使いが、ついに動いたのだ。

イシュトの視界が、真っ白に染まる。

そして、壮絶な爆音が響きわたった。

とてつもない衝撃が、イシュトの全身に襲いかかる。第二形態の巨軀きよくでさえも、枯れ葉のごとく吹き飛ばされてしまう。

「バカな……こんなところで……俺は死ぬのか……………」

そのつぶやきを最後に、イシュトの意識は闇やみに閉ざされた。

――時に、暗黒暦五二八年・幽冥おうれいの月・第十二日。

第二代魔王イシュヴァルト・アースレイは、勇者たちに討伐うちばつされた。

享年二十九。

在位期間は六六六日。

魔王イシュトの物語は、そこで幕を閉じるはずであった。だが――。

## QUEST 1 「一敗地に塗れたからといって、それがどうした」

## 1

今夜の満月は、不気味なほどに紅い。

ここは、大陸随一の大国——レハール王国の最北部。

普段は濃紫色を帯びた荒野だが、今夜は深紅の月が煌々と輝いているおかげで、大地は赤紫に染まっていた。

そんな地域に、巨大な建築物があった。

——バルディオス神殿塔。

石造りの、かなり古い建築物だ。

全十三層で、内部は迷宮のごとく入り組んでいる。

その最上層の大広間で、壮絶な死闘が繰り広げられていた。

挑むのは、王都の名だたる冒険者たちで構成された特別遠征部隊。総勢百名。

十日ほどを費やして、彼らは最上層にたどり着いたのだが——。

このダンジョンに君臨するドラゴン——暴虐の怒石竜の二つ名を持つベルグントの強さは、彼らを圧倒した。

「くそっ！　なんて野郎だ！」

「もう逃げるしか……」

「早く応急処置を！　このままじゃ死んじやう！」  
最上層フロアは、阿鼻叫喚の巷と化していた。

——暴虐の怒石竜。

見た目はトカゲに似ているが、地属性に特化した竜族——アース・ドラゴンの最上位種だ。厄介なことに、攻撃魔法は効かないことが、すでに判明している。

戦闘開始後、黒魔道士隊が唱えた魔法は、ことごとく無効化された。

となれば、物理攻撃で仕留めるしかないのだが、縦横無尽に暴れまわるドラゴンに接近するのは、自殺行為に等しい。

しかも、上級モンスターに指定されているバジリスクを大量に従えており、隊員たちは次第に分断されていった。事前に何度も練習していたフォーメーションも、なんら役には立たなかった。

負傷者が続出しているため、神官や白魔道士は引っぱりなしに回復魔法を唱えている。ポー

それでも、なんとか踏み留まっている少女が、ここに一人――。

純白の騎士の乙女——アイリスは、白銀の軌跡を描きつつ跳躍した。

全身を使い鱗に覆われたベルグントの弱点は限られている。その一つが、柔らかな腹部だ。あそこなら鱗に覆われていない。

だが——ベルグントが放った火焰フレスの威力は、アイリスの予想をはるかに超えていた。

まるで、目の前で火山が噴火したのかと思ったほどだ。

回避したつもりだった。実際、直撃こそ免れたが、アイリスの身体は軽々と宙を舞っていた。ブレスの余波を浴びてしまったのだ。

そして、落下。硬い石畳に全身を打ちつけられてしまい、息が詰まった。

ダメだ。身体が思うように動かない。かろうじて剣の柄は握りしめているが、しばらくは立ちあがれそうになかった。

胸部をはじめ、急所を覆っていた防具の多くが吹き飛ばされている。もはや半裸に近い姿だった。傷口がズキズキと痛む。

と、ベルグントが凱歌のような雄叫びをあげた。

その口からは、いまでも第二のブレスが吐きだされようとしていた。

万事休す。

せめて騎士として、誇り高き死を――。

次の瞬間、強烈な閃光が視界を真っ白に染めたかと思うと、爆発音が轟いた。

まぶしさのあまり、アイリスは目を閉じた。

やがて、アイリスは目蓋まぶたを開いた。

頭はがんがんするし、特に耳鳴りがひどい。あの爆発音のせいで、一時的に聴覚が失われてしまったらしい。

ベルグントが第二のプレスを吐いたのかと思ったが、そうではないようだ。

一体、目の前でなにが起きたというのか――。

大地に這いつくばったまま、素早く周囲を観察する。そして、驚愕した。

ドーム状の天井部が、完膚なきまでに破壊されているのだ。

大量の瓦礫が、フロアの中央部分に散在していた。幸いにも、後退を余儀なくされていた遠征部隊は、巻きこまれずにすんだようだ。

アイリス自身、先ほどベルグントに吹き飛ばされたおかげで、瓦礫の下敷きにならなかったのは、怪我の功名といえた。

一方、アイリスたちを散々に苦しめたバジリスクの群れは、目の前の怪現象におどろいてしまったらしく、一目散に逃げだした。望外の幸運だった。

ただし、ベルグントだけは格が違った。

この異常事態を前にしても、怖じ気づいた様子は皆無である。その場でじっと身構えながら、周囲を警戒している。もはやアイリスを見てはいなかった。

「なにが起こったというの……？」

頭上から冷たい夜気が入りこんできて、アイリスの肌を撫でた。

## 2

夜天の中央では、紅い月が真円を描いている。

そのとき、アイリスは気がついた。

ベルグントの前方に、見慣れぬ少年の姿があった。

「あの男の子……だれ？」

少年は、まるで光の洪水のなかから生まれたかのように、そこに立っていた。

黒髪に深紅の瞳。目つきは鋭い。

細身の身体は、マントのような布きれで覆われているだけだ。

「……どこだ、ここは？」

と、少年はふしぎそうにつぶやいた。

そのとたん、強烈な違和感を覚えて、自分の身体を丹念に調べ始める。

「なっ！ この身体は……なんだ!? 随分と縮んだものだな。これでは……まるで人間ではないか」

少年は記憶を探ってみた。

断片的な情報が、少しずつ甦っていく。

「そうだ……俺はイシュト。暗黒大陸を統べる魔王にして、すべての魔族の頭領——イシュヴァルト・アースレイだ。たしか、あの猪口才な勇者どもと戦っていたはずだが……」

思い出そうとしたとたん、ズキリと頭痛がした。

「くっ……まだ記憶が混乱しているな。決定的な瞬間が思い出せんとは……」

なんとか思い出せたのは、魔王城の最上層フロア——謁見の間にて、勇者パーティーと対峙した場面までだ。どのような戦況だったのかは、残念ながら思い出せない。

ただし、自分が勇者たちに敗北したことだけは、察することができた。

そうでなければ、自分はいまも魔王城の最上層で、玉座に就いていたはずである。

「まずは現状を把握せんとな……」

とりあえず、周囲を観察してみた。

数百人は収容できるだろう、広大なフロアである。ただし、床には瓦礫が散在しているので、どういう目的の建物かは判然としない。

フロアのあちこちには、武装したヒューマンや亜人種が倒れている。壁際には負傷者たちが集まっていて、無事な者が治療に当たっていた。ただし、治療の手は止まっているようだった。だれもが呆然として、イシュトのほうを眺めているからだ。

「ふう……なんなのだ、この状況は？」

どうやら、ここは戦場の真つ只中らしいが——。

なにげなく天井を見上げると、夜空が広がっている。

屋根は隕石でも衝突したかのように、無惨にも破壊されていた。なるほど、周囲に散在している瓦礫の正体は、天井を構成していた石材らしい。

血のように紅い満月が、煌々と輝いている。

たまに月が紅い色を帯びるのは、自然現象の一種である。魔王たる者、そのくらいの知識はある。無闇に恐れる必要はないと思った。

問題なのは、月のサイズと個数だった。

「なんだ、あのバカでかい月は……しかも、たった一つしか見えんぞ？」

混乱していた記憶が、少しずつ解きほぐされていく。

そう、イシュトが生まれ育った世界には、月が三つあった。もつとも、そのうちの一つは、イシュト自身が即位式の余興で破壊したのだった……と思い出す。

なんにせよ、イシュトが見慣れた夜空とは、明らかに様相が異なる。

「もしや……ここは『異世界』なのか？」

「——ガルルル……」

その可能性に思い当たった直後、野獣のような唸り声がイシュトの耳朶を打った。

「なんだ？」

イシュトは面倒くさそうに、背後を振りかえった。

眼前に、巨大な影があった。

「ほう。翼こそ見あたらんが、その堂々たる体軀——ドラゴン的一种と見える」  
 イシュトは余裕たつぶりにつぶやいた。

形状こそトカゲに近いが、おそろしく巨きい。

鱗は漆黒で、てらてらと不気味に光っている。

とはいえ、イシュトが住んでいた世界においても、様々なドラゴンが棲息していたので、別におどろきはしない。

その目が爛々と輝き、イシュトを睥睨している。

どうやらイシュトを獲物と見なしたようだ。

「いや……ちよつと待て。この状況は、まずくないか？」

いまさらながら、イシュトは戦慄した。

魔王時代の彼ならば、この程度の竜種など、赤児の手をひねるように倒せたはずだ。

だが、いまのイシュトときたら、見るからに生白いヒューマンにしか見えない。

「グオオオオオooooooooooooo——」

と、ドラゴンが一声吼えると、猛然と炎を噴いた。

瞬時にして、イシュトの全身が炎に包まれる。

——あ……死んだ？ うむ、これは死んだな……。

せつかく異世界で目覚め、新たな肉体を得た。

冷静に判断すれば、転生したと考えていい。

だが……せつかく期待を持たせておきながら、この仕打ち。

自分の運命を呪う間もなく、全身が焼け焦げて——。

「ん？ 妙だな。痛くも痒くもないぞ？」

ふと、イシュトは気づいた。

あれほどの猛火にさらされながらも、肌には火傷一つない。

ただし、身体を覆っていた布きれは焦けてしまった。

見覚えのない布だが、これは記憶が混乱しているためだろう。

おそらく、魔王時代に着用していたマンントの切れ端ではないだろうか。そうでなければ、ドラゴンの火焰にさらされた時点で炭化していたはずだ。いまだ原型を保ちつつ、イシュトの肌を覆い隠しているのは、さすがといえた。

「——!?」

と、炎を収束させたドラゴンが、奇妙な声をあげた。

ノードメージのイシュトを見て、さすがに焦ったのだらう。怪訝そうに首をひねっていたが、そこは野性の動物だけあって、疑問よりも怒りが優先したようだ。

続けざま、ドラゴンは禍々しい眼光を放った。



互いの目が合ったとたん、イシュトの全身に異変が生じる。

「むっ？ これは……！」

見る見るうちに、皮膚のあちこちを石灰じみた物質が覆っていった。

わずか数秒にして石化は完了し、あとには少年の石像がたたずむばかり。

頭の中から爪先に至るまで、すっかり石化していた。

……ところが、ふしぎとイシュトの思考は途絶えていなかった。

むしろ冷静に状況を分析している。

——どうやら、あいつと目が合ったことで「石化」が発動したらしいな。それにしても、奇妙だ。石化といえば、ほとんど死と同義。意識は失うはずだが、こうして俺の思考はちゃんと持続している……とりあえず、抵抗してみるか。

すでに全身の感覚は失われていたが、イシュトは丹田のあたりに意識を集中させてみた。

その直後、ビシビシという亀裂音とともに、肌という肌を覆い尽くしていた石が砕け散った。見る見るうちに、身体感覚も回復した。

イシュトは自分の身体をたしかめた。無傷である。

「——!?」

再び、ドラゴンが奇妙な声を発した。もはや及び腰である。ドラゴンの思考を翻訳するなら、「お前は一体、なんなのだ!?」といったところだろうか。

「ふむ。見た目は貧弱なヒューマンだが、多少は魔王時代の能力を引き継いでいるらしい。自分の身体のことながら、よくわからんが……まあ、なんだ」

イシュトは、にやりとした。

「次は、俺の番というわけだ——」

### 3

俯せに倒れていたアイリスは、信じがたい光景を目の当たりにした。

一体、戦闘中になにが起きたのか……まだ十五歳ながらも、数々の冒険を経験してきたアイリスでさえ、理解できない事態だった。

たしかなのは、まるで落雷のような怪現象とともに、謎めいた少年が出現したことだ。

特別遠征部隊のメンバーに、あんな少年はいなかった。そもそも、武器も防具も装備していない時点で、部外者に決まっている。

年齢は十八くらいだろうか。

黒髪で、ほっそりとした体型だ。

一体、彼は何者なのか？

次の瞬間、アイリスは「逃げて！」と叫ぼうとした。

……遅かった。

ベルグントが容赦なく火焰フレスを吐いたのだ。

瞬時にして、少年の身体が猛火に包まれる――。

「そんな……！」

死者を一人も出さない――この特別遠征を始めるにあたり、アイリスは胸に誓った。

だが、それが危機に陥ったときは、全力で護るのだと。

だが……アイリスが見ている前で、少年は全身を焼かれてしまった。

竜族の炎を真っ向から浴びたのだ。骨の欠片すら残らないだろう。

あまりに呆気ない、一瞬の出来事だった。

アイリスは自分を責めた。

本調子であれば、彼を救うこともできたはずだ――。

次の瞬間、

「――!?」

アイリスは瞠目した。

あの少年は、ドラゴンの炎が収まったあとも、当たり前のように立っているのだ。身体を

覆っていた布きれは煤けているが、本人は無傷のように見える。

と、次の瞬間、ベルグントが「石化の視線」を放った。

見る見るうちに、少年の全身が石化していく。

「しまった！」

アイリスは再び慚愧の念に駆られた。

ほんの数秒間ではあったが、あの少年を救いだすチャンスならあった。自分が飛びこみ、あの少年を抱えて跳躍していれば……。

だが、少年がベルグントの炎に耐えたという現実が異常すぎて、身動き一つとれなかったのだ。

「グオオオオオオオオオオオオッ……！」

たちまち、ベルグントが勝利の雄叫びをあげる。

その直後、少年の身に異変が起きた。

全身を覆いつくしていた石灰に無数の亀裂が生じたかと思うと、ばらばらと剥離したのである。

「なっ……！」

アイリスは茫然自失。

あらゆる状態異常のなかでも、石化は特に厄介だ。

生半可な白魔道士では解除できないし、石化を解除可能なポジションは目の玉が飛び出るほど高価である。しかも、石化している間に攻撃されたら、全身が割れ砕けてしまう。むろん、それは死を意味する。

自力で石化を解除してしまうなど、常識外れもいいところだった。

「……」

と、少年が異国の言葉で、なにかを告げた。意味はわからないが、アイリスの耳には、なんだか勝利宣言のように響いた。

次の瞬間、ベルグントが少年に襲いかかった。

さすがのベルグントも、目の前で徹底的に「常識」を覆ってしまったため、頭に血を上らせたようだ。あるいは、正体不明の恐怖に突き動かされたのかもしれない。

前足による物理攻撃。ヒューマンの胴体など、易々と真つ二つにできそうな爪が、深紅の月明かりをきらりと照り返す。

だが、少年は軽く身をかめると、その爪を紙一重でかわした。

その流水のような動作の見事さに、アイリスは息を呑んだ。

すかさず、少年はベルグントの懐に潜りこむ。

体表面の多くを頑丈な鱗で覆われたベルグントだが、腹部だけは柔らかい皮膚が覗いている。アイリスをはじめ、多くの騎士たちが狙おうとしたが、ことごとく阻止された。ベルグ

ント自身、自分の弱点は百も承知なのだ。

だれ一人として到達できなかったそこに、少年は易々と入りこんだ。

そして、柔らかい腹部に拳を叩きこむ。

それは一見、なんの変哲もない、ただの打撃にすぎなかった。

だが――。

「グギヤアアアッ……!」

ベルグントが喉の奥から絞りだしたのは、あろうことか断末魔の叫びだった。

その巨体が、ゆっくりと傾いていく。

やがて、ずん……と地響きが起こった。

砂埃が濛々と舞いあがり、アイリスたちの視界を霞ませる。

「まさか……ドラゴンを素手で倒したというの……!?!」

アイリスは呆然とつぶやくと、負傷した身体に鞭打って、立ちあがった。そして、少年のもとを指した。

だれかが近づいてくる気配がしたので、イシュトは面倒くさそうに振り返った。

銀髪の少女だった。切迫した表情を浮かべている。

まだ十代の半ばと見えるが、騎士らしい風格を感じさせる。もつとも、見るからに満身創痍で、あられもない姿だ。白い肌のあちこちが露出していて、艶めかしい。本人は気づいていないのか、無頓着な様子だった。

「戦闘部隊の一員か……？」

イシュトは警戒しつつ、銀髪の少女と対面した。

ここが本当に異世界だというのなら、現状、味方は一人もいないと考えたほうがいい。油断は禁物だと肝に銘じた。

それにしても、美しい少女だと思う。

滝のように流れ落ちる銀髪が、紅い月の光を浴びて、つやつやと輝いている。肌は白磁のよう。瞳は紫水晶だ。イシュトの目には、まるで雪の精のように映った。

「……！！」

少女はしきりになにかを訴えかけているが、言葉の意味がわからない。それでも、少女に敵意がないことだけは伝わってくる。

なにより、その鈴をころがすような声は、イシュトの耳に心地よく響いた。生まれてこの方、これほどの美声を聞いたことがないと思えたほどだった。

——どうしたものか……。

イシュトは焦れた。

この異世界で、初めて接触した人物だ。できれば、この世界についていろいろと質問したい。たかが言葉の壁とときで、時間を浪費するのはバカバカしい。

「一つ、試してみるか。もしかしたら、魔王時代のスキルが使えるかもしれない——」

イシュトは銀髪の少女に手のひらを向けた。「しばし待て」という意味の手信号を送ったつもりだった。通じるかどうかは謎だったが、少女はきょとんととして、口を閉ざした。

イシュトはくるりと轉身すると、完全に沈黙したドラゴンに歩み寄った。

ドラゴンといえば、単に強いだけのモンスターではない。有史以来の情報を貯蔵し、子孫へと受け継いできた賢者としての側面もある。むしろ、異世界のドラゴンも同じだとは限らないが、情報の貯蔵庫としての役割を担ってきた可能性は考えられる。

すでに息絶えているので、知識を吸い取るならば、一刻も早いうちがよい。

もちろん、目の前の少女から言語情報を抜き取ることも可能だが、身体に触れねばならないのがネックだった。魔王の割に、イシュトには紳士的な一面があるのだ。

その点、相手がドラゴンの死骸ならば、気兼ねなく触れられるし、蓄えている情報量も桁違いだろう。

イシュトはドラゴンの頭部に手を触れた。

スキルを発動させる。

イシュトの全身が蒼白く輝いた。

その美しい光は、やがてドラゴンの体軀をも包みこんだ――。

――世界地図、地形、気候、生物、植物、鉱物資源……棲息する知的生命種の種類と分布図……世界各地の神話・伝説、歴史、魔法原理、自然科学、通貨、度量衡……等々。

イシュトが予想した通り、ドラゴンの脳は様々な情報を蓄えていた。もつとも、パワー系というか、あまり賢いドラゴンではなかったようで、基本情報ばかりだったのは残念だが、あるのとないのとは大違いである。

今後は必要に応じて、脳裡で必要な情報を検索し、呼び出すことができる。

この情報集を、イシュトは『異世界百科』と呼称することにした。イシュトの母国語に由来する造語である。

早速、基本情報を閲覧してみる。

視界一面に、大量の文字や絵図が表示された。

現在地も判明した。

「ほう……」

ここはアルカディアス大陸の大半を統治する大国――レハール王国の領内。場所は「バルディオス神殿塔」。国内地図を閲覧すると、辺境地帯であることがわかった。

総合的な文明レベルは、イシュトの祖国と大差ないようだ。ヒューマンをはじめ、様々な知的生命種が共存共栄しているという点も同じである。

なお、この王国の公用語は現代レハール語だという。

おそらく、先ほど銀髪の少女が使っていた言語であろう。ありがたいことに、ドラゴンは今代レハール語の「辞書情報」も蓄えていた。

圧縮されていた言語情報を脳裡で展開することで、イシュトは瞬時にして、現代レハール語を完全にマスターすることができた。

「いま、なにをしたの？ ふしぎな魔力を感じたけど……」

と、銀髪の少女が怪訝そうに尋ねてきた。

今度は理解できたので、イシュトは会心の笑みを浮かべた。

リスニングが完璧ならば、次は話せるかどうかを試す必要がある。

イシュトが口を開こうとした、そのときだった。

「――あなたは、何者です？ 突然、この場に出現したように見えたが……」

小さな魔法使いが、忽然と現れたのだ。まるで瞬間移動をしたように見えた。

「むっ？ 妖しき技を使うやつだな……」

イシュトは警戒した。

年の頃は十歳ほどである。あまりに幼いので、この戦場には不釣り合いに見えた。こんな幼

女までが、戦闘部隊に所属していたとは意外だった。

黒ずくめの幼女は、銀髪の少女の隣に立ち、イシュトをじっと見つめている。敵意は感じないが、人形じみた無表情を浮かべているので、なにを考えているのか読み取れない。

魔女——ふいに、そんな言葉がイシュトの脳裡をよぎった。

そう、この幼女を形容するのに、最もふさわしい言葉は、まさしく魔女であろう。とんがり帽子にローブという出で立ちは、イシュトの前世においても魔女の象徴であった。

「妖しい技というなら、お互い様です。たったいま、ドラゴンの死骸から情報を抜き取りましたね？」とんでもない秘術です……」

「ほう、わかるのか？ 見た目こそ幼いが、なかなか優秀だな」

イシュトは感心すると、銀髪の少女を見やった。

「先ほど、お前の言葉がまったく理解できなかったの。このドラゴンを利用させてもらっただぞ」

「あなたはだれ？ どこから来たの？ どうして、そんな力があるの!？」

銀髪の少女は一步を踏みだすと、矢継ぎ早に尋ねてきた。

「待て。そう一度に尋ねられても困る」

「そう……でも、これだけはいわせて」

その真剣な表情の前に、イシュトは思わず身構えたが、

「ありがとう。あなたのおかげで、だれも死なずにすんだみたい。本当に、ありがとう」

少女は、深々とお辞儀をしたのだった。

これにはイシュトも面食らった。

いくら凶暴なドラゴンを倒したとはいえ、彼女たちからしてみれば、イシュトは得体の知れぬ存在のはずだ。よほどのお人好しなのか、あるいは器が大きいのか……。

「いや……大したことはしていない。俺はただ、自分の身を守っただけだ」

イシュトは照れながら、さりげなく目を逸らした。少女が頭を下げたとたん、淡くふくらんだ胸の谷間が覗いてしまったのだ。

ただでさえ、衣服のあちこちが破れているので、なんとも目のやり場に困る。

元々は胸甲などを装備していたのだろうが、戦闘中に破損したらしい。かなり過酷な戦いだったのだろう。

と、少女がふしぎそうに尋ねてきた。

「ねえ、武器は持っていないの？ わたしの見間違いないかなければ……素手でベルグントを倒したように見えたけど」

「まあな。この拳で、ぶん殴った。それだけだ」

「——そんなわけあるかああああああっ！」

と、背後から強烈なツツコミが入った。

現れたのは、重槍騎士の女である。

紅蓮の髪を頭のサイドで結っている。その表情はきりりとして凛々しく、いかにも騎士らしい。片足を引きずっているが、巨大な槍・斧を杖代わりにすることで、なんとか歩いている。彼女も満身創痍で、防具のあちこちが破損していた。その身体は銀髪の少女よりもはるかに成熟していて、これまた目のやり場に困った。

「あいつは、暴虐の怒石竜——ベルグントだ！ アース・ドラゴンの最上位種だぞ！ 素手で倒せるわけがないだろうが！」

「……そういわれてもな。嘘はついていない」

イシュトは肩をすくめてみせた。

「ぐぬぬ……」

重槍騎士は喉の奥で唸りながら、銀髪の少女の前に歩み寄った。先ほどとは打って変わって、恭しい態度で尋ねる。

「いかがでしたでしょうか？ 我々が彼に救われたのは事実ですが、これほどの力の持ち主を放置しておくわけにはまいりません。彼がいかなる出自の者で、どこからやってきたのかも謎です。あのふしぎな光が炸裂したと同時に、出現したようにも見えましたが……」

「だね」

銀髪の少女はうなずいた。しばらく沈黙考していたが、やがて、イシュトに視線をもどし

た。

「そうだ。まだ名前を聞いてなかったね。教えてくれる？」

「イシュトだ」

とりあえず、前世における愛称を伝えた。

「イシュト？ 変わった名前だね」

少女は小首をかしげた。

「俺自身、まだ自分の状況が把握できていない状況だな。記憶も部分的に欠落している。これは憶測にすぎんが、どうやら一度死んだあと、この世界で生まれ変わったらしい。赤ん坊からやり直すというのではなく、いきなり少年の肉体を得た上での再スタートというのが、なにやら腑に落ちんがな。まあ、信じる信じないは、お前たちの勝手だ。かくいう俺自身ですら、半信半疑なのだから……」

銀髪の少女も重槍騎士も、そして小さな魔女も、真顔で沈黙している。なんと反応すればよいのやら、困っているのだらう。

そのとき、やや離れた位置から、素っ頓狂な声があがった。

「あれれーっ？ うちが気が失ってる間に、ベルグントのやつ、くたばってるやん！」

耳の長い少女が、ベルグントの死骸の前で目をみはっている。

どうやら妖精族の一種、エルフらしい。燦然と輝くオレンジ・ゴールドの髪を肩先でカッ

トしており、活発な印象を与える。肩には豪華な装飾を施した騎銃を掛けている。イシュトの世界にも銃器は存在したが、かなり趣が違う。

そんなエルフ娘の傍らには、狼と呼ぶには大柄な獣が控えていた。額から角を生やした狼は、さすがのイシュトも初めて目撃した。こっそり『異世界百科』を検索してみると、聖獣と呼ばれる種族らしい。

「おお、目覚めたか！ 怪我の具合はどうだ？」

と、重槍騎士がエルフ娘に呼びかけた。

「これくらい、睡つけときゃ治るわー！」

エルフ娘は気丈に答えつつ、イシュトたちのもとにやってきた。その言葉とは裏腹に、あちこちに怪我を負っているのは、銀髪の少女や重槍騎士と同じだった。

「こちらはイシュト。ベルグントを倒したのは、彼だよ」

と、銀髪の少女がエルフ娘のために説明した。

「へえ。でも、こんな男の子……特別遠征部隊におったかなあ？ 服装も変やし……」

エルフ娘は好奇心いっぱいの眼差しで、イシュトを見つめてきた。

「ところで、こちらが名のつたのだ。お前たちも自己紹介をしたらどうだ？」

と、イシュトはうながした。

「だね」

と応じて、まずは銀髪の少女が進み出た。

「わたしはアイリスフラウ・リゼルヴァイン。アイリスで構わないよ」

アイリスが名のつた直後、重槍騎士がずいっと身を乗りだしてきた。

「よいか、イシュト。アイリス様を、そこらへんの騎士と一緒にしないでもらいたい。なんといつても、アイリス様は誉れ高き白騎士<sup>ロスヴァイセ</sup>なのだからな！」

「ロスヴァイセ？」

イシュトは眉をひそめた。先ほどマスターした現代レハール語に、そのような単語はなかったのだ。

「純白の騎士の乙女」を意味する古代語だ。アイリス様の二つ名であると同時に、固有職業<sup>ジョブ</sup>の名称でもある。固有ジョブを認められることが、どれほど名誉なことか……お前には到底わからんだろうが、肝に銘じておくがいい！ 以後、アイリス様に対して、馴れ馴れしい態度は慎むように！ そもそも、アイリス様の武勇伝が始まったのは——」

熱弁を振るう重槍騎士。このままだと、延々と喋り続けそうな様子である。

「あの……もう、その辺で……」

重槍騎士の背後で、アイリスは真っ赤になっていた。なんとというか、親バカな母親にべた褒めされて、恥ずかしがっている娘のような風情だった。

「わかったわかった。白騎士<sup>ロスヴァイセ</sup>については理解した。それで、お前の名は？」



イシュトが尋ねると、重槍騎士は「こほん」と咳払いをした。

「これは失礼した。我が名はランツエルーナ・カレンベルク。愛称はランツェだ。アイリス様にお仕える騎士であり、本来ならば、命を賭してアイリス様をお守りせねばならないというのに……先ほどは足を負傷してしまい、不覚を取った。……くっ！ これはもう万死に値する……！」

と、身悶<sup>みもだ</sup>えするランツェ。

面倒くさそうな女騎士だ……と、イシュトは呆<sup>あき</sup>れた。真面目<sup>まじめ</sup>も度が過ぎると、ろくなことにならないという、典型例を見た思いがした。

つづいて、エルフ娘が天真爛漫<sup>てんしんらんまん</sup>な笑顔で自己紹介をした。

「うちはルテッサ・オルフや。職業は獵師<sup>シヨフ</sup>！ よろしゅうな〜」

やたらと陽気なエルフである。堅物すぎる重槍騎士の直後だけに、余計に柔らかな印象を受けた。

と、ルテッサは、傍らで大人しくしている聖獣の背中を撫でてやった。

「この子はうちの相棒でな、クルルや。この子を『クーちゃん』と呼んでええのは、うちだけやから、覚えといてや。あつ、それとな！ うちらは『銀狼騎士団』つちゅう名前<sup>なまえ</sup>で活動してるんやけど、リーダーはだれやと思う？」

突然、ルテッサは質問を飛ばしてきた。

「ふむ。アイリス……と見せかけて、その聖獣か」

イシュトが回答すると、ルテッサは愕然<sup>がくぜん</sup>とした。

「なっ！ なんてわかったんや〜!? 天才か!？」

「いや、いまの話の流れだと、そうなるだろう。わざわざ組織名に『銀狼』を冠しているしな。こちらを引っかけようとする意図が、見え見えだったぞ」

「いや、参ったわ。うちら、ええ友達になれそうやん！」

ルテッサは嬉々として、イシュトに飛びついてきた。

「おっ、おい！ なにをする！」

イシュトは逃れようとしたが、ルテッサは怪我人のくせして、妙にすばしっこい。あつという間に、イシュトの背中に密着してしまった。

そのとき、異変が起きた。

イシュトの身体を覆っていたマントの繊維が、ぼろぼろと崩壊を始めたのだ。一般的な布と比べれば異常なほど頑丈だったものの、ドラゴンのプレスを浴びたり、石化攻撃にさらされたりしたせいで、かなり痛んでいたのだろう。

そこに、ルテッサの体当たりがトドメを刺したようである。

あつという間に、イシュトは全裸になってしまった。

肌を隠そうにも、すでにマントは原型を失っている。

「ひゃっつ！」

ルテッサはイシュトから飛び離れると、両手で目を覆ったが……こっそり指の隙間から覗いているのがバレバレだった。興味津々の年頃らしい。

「……………」

一方、アイリスは頬を紅潮させながら、困ったように視線を逸らした。

「事案発生ですね」

対照的に、あくまでも冷静につぶやく魔女。まったく動揺していない。まるで冷徹な錬金術師のような目をして、この事態を淡々と見守っている。

「きやああああああああああああっ！」

いちばん可愛らしい反応を示したのは、意外にも重槍騎士のランツェだった。

「ふう……」

とりあえず、ランツェのマントを借りることで、イシュトは肌を隠すことができた。

と、小さな魔女がくるるときびすを返し、てくてくと歩きだした。

「待て。まだ、お前の名前を聞いていない」

イシュトが呼び止めると、

「ゲルダです。あなたが何者なのか、どんな理由で、どこから来たのか……興味は尽きません

が、いまは負傷者たちの転送を優先させてもらいます」

ゲルダは淡々と答えた。事実、フロアのあちこちでは、いままも救護活動がつづいており、野戦病院さながらの様相を呈していたのである。

## 5

その後、怪我の具合が深刻な者から、順番に転送されていった。

転送魔法を使えるのはゲルダだけで、しかも一度の魔法で転送できる人数には制限があるらしい。

イシュトからすれば、魔法の力で人や物を転送できること自体、おどろきだった。魔法文明に関しては、イシュトの祖国よりもはるかに先進的だと思われる。

地道に転送魔法が繰り返された結果、少しずつ人数が減っていく。

最終的に、フロアに残ったのは、イシュト、アイリス、ランツェ、ルテッサとクルル、そしてゲルダとなった。アイリスたちは負傷していたが、待機中に白魔法やポーションを使用したおかげで、少しは回復した様子である。

「光明神リユミエリスよ——」

と、ゲルダが呪文の詠唱を始めた。

呪文に合わせて、ゲルダの足元に魔法陣が生じる。すでに何度も見せられた光景だったが、その紋様の精緻さには、溜息が洩れるばかりだった。

「開門せよ……我らを王都へ導け——ゲート・オブ・ディメンション」

と、ゲルダの呪文が最後の一節にたどり着いた。

その直後、全身がふしぎな浮遊感に包まれ、足が地面から離れたような感覚に襲われた。

……イシュトたちが転送されたのは、小高い山の上だった。

山の端から、黎明の光があふれている。

「おお。この世界にも、ちゃんと夜明けが来るのだな……」

しみじみとした気分で、イシュトはつぶやいた。

足元には緑の草が生い茂り、葉先には朝露が光っている。

荒れ果てた神殿塔とは打って変わって、瑞々しい光景だ。

空気が澄みわたり、早起きな小鳥たちがさえずっている。

「——あれが、王都アリオス。わたしたちが拠点とする街だよ」

と、アイリスが彼方を指さした。

イシュトは見た。

見わたす限りの草原の中央に屹立する、巨大な街を。

その四方を、いかにも堅牢そうな防壁に囲まれた街は、なるほど、王都と呼ぶにふさわしい威容を感じさせた。

魔王の悪癖というべきか、まずは門の位置や周辺の地形をさりげなく観察する。

もし、あの街を自分が攻め落とすなら……そこまで考えて、イシュトは苦笑した。いくらなんでも、気が早いと思っただのだ。

のちほど、『異世界百科』で王都の詳細情報を得ておいたほうがよいな、とイシュトは思った。そんなイシュトのそばでは、ルテッサたちが談笑にふけていた。

「はあ。ゲルダちゃんの転送魔法は便利なんやけどな。転送場所に制約があるのが残念やわ。ここから王都まで、徒歩一時間。これが地味にツライんや……」

「文句をいうな。そもそも、なにが徒歩だ。お前はクルル殿に乗りっぱなしだろうが。どうせなら、その席はアイリス様に譲るべきではないのか？」

と、ランツェが眉を吊りあげてたしなめた。

「問題ないよ、ランツェ。わたし、歩くの好きだから」

と、アイリスが苦笑まじりにいった。

「法律で禁じられているので、仕方ありません。市街地や、王都の周辺地域で転送魔法を使ってはならないのです。今回、伝令と負傷者だけは、特例として入場門のそばに転送してあげましたけど」

と解説しつつ、ゲルダは聖獣クルルの背中にちよこんと腰かけて、ルテッサの腰に手を回した。この小さな魔女も、自分の足で歩くつもりはないらしい。

「それじゃ、行こうか」

アイリスの言葉を合図に、少女たちは歩きだした。

イシュトは彼女たちを追いかけようとして、ふと、雄大な景色を振り返った。

美しい景色だった。

ならばこそ、手に入れる価値があると思った。

「一敗地に塗れたからといって、それがどうした」

思わず、口元から笑みがこぼれ落ちた。

「この世界で、やり直す。そして、今度こそ——世界を我が手に！」

## QUEST 2 「わたしが、イシュトの後見人になる」

### 1

今日は週に一度の、朝市の日だという。

けたたましい鶏鳴が聞こえてくるような早朝だが、中央広場では商人たちが新鮮な食材や香辛料などを売っていた。

威勢の良い商人たちの声が響き、客を集める光景には活気があった。

なお、目の前の群衆を眺めやると、全体の六割ほどはヒューマンだが、妖精族や獣人なども交じっている。

アイリスたちは寄り道することなく、メイン・ストリートに臨む二階建ての館に入ろうとした。

ふと、イシュトは立ち止まった。

軒先の看板に『冒険者ギルド 王都支部』と記されている。

「なっ！ 冒険者だとい！」

思わず叫んでしまう。

かつて魔王イシュトを倒した勇者たちもまた、元をたどれば一介の冒険者にすぎなかったのである。冒険者とは、いわば勇者の卵……それがイシュトの認識だった。

「おい、どうして冒険者ギルドなんだ？ 俺のような不審者を確保したのなら、治安組織の詰め所あたりが妥当だと思わうが？」

イシュトが尋ねると、アイリスは意外そうな顔をした。

「そっちのほうが好みなの？ イシュトが夜盗の類なら、近衛騎士団か自警団に引き渡すのが筋だけど……イシュトは命の恩人でもあるし、犯罪者扱いはしたくないと思ったから」

「むう……」

どうやら、アイリスなりに気遣ってくれた結果らしい。

「それに、近衛騎士団も自警団も多忙な組織だから。王都の警備に加えて、周辺地域のモンスター討伐、頻繁に出没する盗賊団……問題は山積みだよ。そういう意味でも、今回のような事案は冒険者ギルドの領分だと思う」

「事情はわかった。ところで、一つ聞いてもいいか？」

「わたしに答えられることなら」

「もしかして、お前たちも冒険者なのか？」

「えっ？ どこから見ても、冒険者にしか見えないと思うけど」

「それでは、お前たちが所属している銀狼騎士団とかいう組織は……」

「冒険者パーティーの名前だよ。べつに、正式な騎士団というわけじゃないから」

「そうだったのか……」

「行くよ、イシュト」

アイリスにうながされたイシュトは、やむを得ず入館した。

建物の一階では、洒落た食堂が営業している。普通の飲食店と違うのは、壁際に巨大な掲示板が設置されており、依頼票が何枚も貼られていることだ。

なにげなく、イシュトは一瞥してみた。中央付近に、特に目立つ依頼票がある。

緊急大募集！

下水道にレッドワームが大量発生中！

初級冒険者、大歓迎！

依頼票の下半分には、レッドワームとおぼしき絵が描かれている。

赤くて巨大な蚯蚓——それ以外の表現が思いつかない形状だ。こんな気色の悪いモンスターと戦わねばならぬ冒険者たちに、イシュトは心から同情した。

そんなことを考えていたら、二階の一室に案内された。

「やあ！ 君がベルグントを倒したという少年かい？」

イシュトが入室するなり、デスクに着いていた女が快活な声をあげた。

妖艶な美女だ。一般的な王都民と比べると、明らかにタイプの異なる着物を着用している。細い腰には美しい帯を巻いている。胸元を大胆にはだけ、抜けるように白い乳房の谷間を覗かせているのが、見るからに悩ましい。

もつとも、彼女の最たる特徴といえ、頭部からによつきりと生えた耳である。その色味と形状から察するに、狐系の獣人族らしい。腰からは、ふわふわの尻尾も生えている。服に尻尾用の穴を空けるのが大変そうだな……とイシュトは思った。

「僕はオルタンシア・レメイ・ベルダライン。冒険者ギルドの王都支部長さ」

「うむ」

「大体の事情は、先に帰還した冒険者たちから聞いているよ。なにも君を取って食おうというわけじゃないから、楽にしてくれたまえ。そもそも、君は特別遠征部隊を救ってくれたそうじゃないか。支部長として、礼をいわせてもらおうよ」

「いや、礼には及ばん。いきなり襲いかかってきたモンスターを、独自の判断でぶん殴った

までだ」

「は……ベルグントをぶん殴るという発想自体が、ぶっ飛んでるんだけどねえ。まあ、掛けてくれたまえ」

ベルダライン支部長は苦笑しつつ、イシュトに応接用のソファを勧めた。イシュトは無言で腰かけた。

「それでは、事情を聞かせてもらえるかな？ 君がどういう人物なのか、正直に教えてほしい。悪いようにはしないからさ。ただし——」

その瞬間、支部長の双眸が、きらりと光ったかのように見えた。

「くれぐれも、嘘はつかないようにね」

と釘を刺しつつ、彼女は手元に設置してある小さな天秤を一瞥した。精巧な造りだが、手のひらに載るような大きさで、実用性はなさそうに見える。

「この天秤はね。その昔、とある遺跡で僕が見つけたものなんだ。見た目は他愛のないオブジェだけど、嘘を感じする機能がある」

「にわかには信じがたいが」

「では、一つ試してみようか」

ベルダラインはにやりとした。そして、まるで芝居の主演にでもなったかのように、声を朗々と張りあげた。

「ああっ！ 僕は支部長という仕事に誇りを感じているんだ！ なんとやり甲斐のある仕事だろうか！ まさしく天職だね！ 僕は冒険者たちを心から愛している！ こんな日々が、いつまでもつづくことを心の底から祈っているよ……！」

その直後、天秤に象嵌<sup>そうがん</sup>されている水晶がカッと鮮烈な光を放つと、天秤棒<sup>てんびんぼう</sup>が左右にカタカタと激しく揺れた。いまにも自壊するのではないかと、心配になるほどの勢いである。

「どうだい？ 理解してくれたかな？」

ベルダラインは得意満面である。

「ふむ。お前が自分の仕事に誇りも名誉も感じてないことだけは、よくわかった」

「いや、そんなに褒められると照れてしまうね」

「褒めたつもりは微塵<sup>みじん</sup>もないが、大した機巧仕掛けだな」

「超古代に造られた聖遺物の一種だね。そういうわけだから、その場しのぎの嘘で切り抜けるなどと考えるのは、お勧めしない。いいかな？」

「よからう」

イシュトは毅然<sup>きぜん</sup>として、自己紹介を始めた。

「我が名はイシュト。正式にはイシュヴァルト・アースレイという。かの暗黒大陸を支配する魔王にして、世界征服という野望に挑みし者であった」

「なんだって？ ちょっと待ってくれ」

ベルダラインは眉<sup>まゆ</sup>をひそめると、手元の天秤を見た。微動だにしていない。

「……つづけてくれたまえ」

「うむ。だが、あの忌まわしき日——魔王城に潜入した勇者どもを迎撃すべく、この俺自ら戦ったのだが……どうやら敗北を喫<sup>くも</sup>したらしいな」

「らしい、というのは？」

と、ベルダラインが鋭く尋ねてきた。

「どうにも困ったことに、記憶の一部が欠落しているのだ。どうしても決定的な瞬間が思い出せん。容赦なく殺されたような気もあるが……とにかく目が覚めたら、この世界にいた。しかも、新しい肉体を手に入れていた。俺が思うに、こちらの世界で生まれ変わったらしいな」

「ええと……」

ベルダラインは、再び天秤を見た。やはり、天秤は静止したままだ。

「……………」

ベルダラインは、言葉に窮<sup>きゆう</sup>した表情を浮かべていたが、やがて、独特な形状をした煙管<sup>きせる</sup>をくわえると、暢気<sup>のんき</sup>に吸い始めた。

「おい。なにを勝手に一服している？」

イシュトが注意するも、ベルダラインは深刻そうな表情で煙を吐いた。

「ふう……君が嘘をついていないのは、たしからしい。実際、この天秤はびくりとも反応しな

かったのだからね」

「むろんだ。なに一つ、嘘などついてはいない」

「ああつ、なんと不憫な！　まだ若いのに、よほど悲惨な目に遭わされたりしいね。奴隷の密売組織から逃げだしてきたのかな？　あるいは、どこかのカルト宗教団体に洗脳されてしまったのかな？　きつと、自分を世界最強の魔王様だと思いこむことで、なんとか精神の均衡を保っていたのだらうねえ……この天秤の機能は、あくまでも嘘を見抜くこと。だけど、本人が虚構を真実だと思いこんでいる場合は、役に立たないんだ」

「おい」

「そもそも魔王だなんて、お伽噺の登場人物じゃないか。実在するわけがないだろう？　ついでにいえば、毎回、決まって勇者たちに討伐されてしまいうられ役だ。あんなモノに浪漫を感じる輩なんて、よほどの物好きか変態さんだよ」

「ぐぬぬ……」

魔王という存在が全否定された瞬間だった。

とはいえ、有益な情報が聞けたのも事実である。

現時点において、この異世界に魔王は存在しない。あくまでも、物語作品のキャラクターだと認知されている。

それはつまり、ライバルが不在ということでもある――。

### 3

「なにはともあれ、イシュト君。いまの君は、由々しき状況にあるね」

魔王云々の話題を切りあげると、ベルダラインは大真面目にいった。

「いや、そうでもないと思うがな」

イシュトは真っ向から否定した。

「第二の人生を許されたのだから、宝くじで一等賞を当てたようなものではないか？」

「本当にそう思うのかい？　身元は不明、住所は不定、所持金ゼロ、装備もゼロ。極めつきは――無職だ！」

「おい。いま……無職といったか？　いうに事欠いて、この俺を……！」

「そう、無職さ。そんな君が、この街で生きていこうと思うと、難儀だね。相当に難儀だ。うん、やはり選択肢は一つしかないかなあ」

「思わせぶらない方はやめろ。その選択肢とやらを、さっさといえ」

「冒険者だよ」

「なっ！　冒険者になれるのか!?　けしからん！　実にけしからん！」

「いや……いまのままだと、冒険者になるのも難しいね。単に資格を得るだけでも、いろいろ



と満たすべき条件がある。まずは後見人を見つけなくちゃね」

「たとえば、どのような人物だ？」

うっかり質問してしまっただけから、イシュトは顔をしかめた。これではまるで、自分が冒険者になったがっているみたいではないか。

「社会的地位のある人物だと理想的だね。王侯貴族とか、学者とか、富豪とか」

「ふん。俺は生まれ変わったばかりだぞ。そんな御大層な知り合いがいるはずもない。いや、それ以前に、冒険者になるつもりはない！」

「困ったな。どうしたものか。残念ながら、たかがギルドの支部長にすぎない僕なんかには、後見人としての資格はないしなあ。ああ、困った！ 本当に困ったよ！ どこかに親切な人がいないかなあ……」

どうにもベルダラインの態度は鼻についた。困った困ったといいながらも、なにやら楽しんでるようにも見受けられる。

「そういうことなら——」

と、突然、ずっと無言で佇立していたアイリスが口を開いた。

「わたしは、イシュトの後見人になる」

その瞬間、室内は沈黙に満たされた。

「わたしじゃ、ダメかな？」

アイリスの眼差しは真剣だった。

ようやく金縛りがとけたように、ランツェがましく立てる。

「なにをおっしゃいますか、アイリス様！ たしかに、この少年の境遇には同情します！ だからといって、アイリス様が後見人になるなど、そんな軽々しいことを！ ご自分のお立場を考えてください！ 絶対に反対です！」

「落ち着きなさい、ランツェルーナ」

と、アイリスが告げた。

その口調こそ淑やかだったが、ランツェは鞭で打たれたように沈黙し、かしこまった。

「はっ、アイリス様」

「わたしを心配した上での忠告、ありがとうございます。だけど、もう決めたことだから」

「……かしこまりました」

意外にも、ランツェは大人しく引き下がった。

「いや、計算通り——うおっほん！ さすがはアイリス嬢！ ありがとうございます！ 心からありがとー！」

この牝狐、かなり腹黒い人物ではなからうか……とイシュトは思った。

「決まりだね」

と、アイリスはイシュトの正面に立った。

「改めて、よろしくね。イシュトなら、いい冒険者になれると思う」

「待て。まだ冒険者になると決めたわけではないのだが……」

「大丈夫。その強さがあれば、問題ないよ。正直にいうとね……わたし、イシュトの強さに興味がある。わたしも、あんなふうにならいたいなって」

と、アイリスはイシュトをじっと見つめた。

紫水晶さながらの瞳に、イシュトの顔が映りこんでいる。

イシュトは思わず、どきりと心臓を跳ねあげた。

そのとき、ランツェが二人の間にずかずかと割りこんできた。

「うおっほん！ アイリス様、そろそろ帰らねばなりません。お忘れですか？ 本日は昼食会の日です。湯浴みに衣装合わせ、ヘアメイク……やるのが山積みですよ」

「むう……残念」

アイリスは、意外に子どもっぽい表情を見せた。

「というわけで、支部長殿。彼については、お任せします」

ランツェはベルダラインに断ると、アイリスの背中を押しつつ退室してしまった。アイリスは名残惜しそうな表情を浮かべていたが、ランツェは妙に強引だった。

「ほなな、イシュト！ ベルグントを倒してくれて、おおきにー！」

ルテッサも笑顔で手を振ると、聖獣クルルを連れて立ち去った。

「……ふう。ゲルダも帰ります」

小さな魔女も腰を上げたが、急にイシュトを振り返ると、まるで幼児が初対面の大人を見あげるような目で、じーっと見つめてきた。

「なんだ。俺の顔に、なにかついているのか？」

「……いえ。なんでもないです」

ゲルダはそっぽをむくと、今度こそ退室した。

おかしい魔女だな、とイシュトは思った。

結局、支部長室にはイシュトとベルダラインだけが残された。

「一つ、気になることがある」

と、イシュトは切りだした。

「なんだい？」

「あのアイリスという女騎士についてだ。どうして冒険者などという、因果な商売をしているのだ？ 俺の後見人になる資格があるということは、よほど高貴な身分なのだろう。冒険者として働く必要など、あるとは思えんがな」

ベルダラインは苦笑した。

「おやおや。アイリス嬢にご執心のようだね。さては、一目惚れかな？」

「他意はない。この世界の情報ならば、一つでも多く集めておきたいだけだ」  
 イシュトは素っ気なく答えた。

ベルグントの死骸から入手した『異世界百科』<sup>リザレグニガイナ</sup>は、どうしても巨視的<sup>マクロ</sup>になりがちだ。たとえるなら、本物の百科事典から主要項目だけを抜きだしたようなものである。市井の問題については、自分で調べるしかないのだった。

「まあ、アイリス嬢はね、いろいろと抱えているんだ。僕の口からいうわけにはいかないけれど、仲良くなれば、教えてもらえるかもしれないよ？」

「そんなつもりはない。そもそも、俺は冒険者という連中が——」

「おっと、そろそろ本題にもどうか。この世界について、そして冒険者制度について、微に入り細を穿つ<sup>うが</sup>レベルで説明しようじゃないか！ そもそも冒険者とは——」

「人の話を聞かんか……」

イシュトは困惑したが、ベルダラインは聞く耳を持たず、嬉々として講釈を始めた。

### QUEST 3 「投石をバカにするものは投石に泣く！」

#### 1

「……まったく、あの牝狐<sup>めぎつね</sup>め。人の話を聞かんとくろなど、魔族の女たちといい勝負だな」  
 ようやくベルダライン支部長の講義から解放されたイシュトは、大通りをてくてくと歩いていた。

魔王時代のイシュトが街を闊歩<sup>かつぽ</sup>しようものなら、魔族たちは素早く道の両脇<sup>りょうわき</sup>に下がり、平伏<sup>ひふく</sup>したものだ……こうして歩いていても、だれも自分に注目しないのは、なんだか新鮮な気分だった。

ちなみに、いまのイシュトは木綿の服を身に着けている。さすがに、裸体をマントで隠しているだけでは不便利だし、不審者扱いされても文句はいえないので、冒険者ギルドに支給してもらったのだ。

イシュトの目から見れば珍妙なデザインだったが、王都アリオスでは標準的なデザインらしい。これは文化の違いというものだろう。

「はあ……冒険者か」

イシュトは屈辱的な気分でつぶやいた。

たしかに、イシュトのような異世界人が法律を犯すことなく、手つとり早く稼ごうと思つたら、冒険者になるくらいしか道はなさそうである。

魔王としては、

——この俺が法律だ！ 異国の法律など、破るためにある！

と一笑に付してやりたいところだったが、なにぶん勇者に敗れたばかりである。ここは慎重にならざるを得なかった。

それに、このヒューマンじみた身体に、どれほどの能力が秘められているのかも、まだ把握しきれていない。

——魔王時代の能力が、どこまで受け継がれているのか？

時間をかけて、じっくりと検証する必要があると思つた。

「——あのう……お花はいかがでしょうか？」

と、胸元に一輪の花を差しだされたので、イシュトはびたりと足を止めた。

その花びらは、目にも鮮やかな黄色だ。楚々とした花だった。甘さと清涼さを兼ねそなえた香りには、心を落ち着かせる効果を感じられた。

実際、もやもやと胸の奥底でわだかまっていた気持ちちが、洗い流されたような気がしたので

ある。

「……ふむ。佳い花だ」

イシュトは素直に、自分が感じたことを口にした。

「あつ、ありがとうございます！」

花売りの少女は、まだ商売に慣れていないらしく、緊張気味に応じた。なんとなく、彼女自身が手にしている花に、よく似ていると思つた。

年齢は十代の後半だろう。やや癖のある金髪を後頭部で結い、背中に垂らしている。透き通るような瞳は、緑柱石の色をしている。

全体的に地味で、おどおどした様子が感じられるが、胸も尻も見事に発育している。もつと自分に自信を抱いてもよさそうなものだが、本人は自分の魅力に気づいていない様子だった。よく見ると、耳の先端が尖っている。エルフに似ているが、純血のエルフほど長いわけではない。ハーフエルフなのだろう、とイシュトは推測した。

イシュトにまじまじと見つめられ、恥ずかしく思つたのだろうか。少女はうつすらと頬を染めながら、申し出た。

「えっと、一輪が十リオンになりますが、よろしければ……」

少女の口調は遠慮がちだ。声も小さいし、ただただ恐縮している様子だった。とても商売にむいているとは思えない。

商人には、ある程度の図々しさも必要とされるものだ。こんな売り方では、いつまで経っても売れないだろう。

そもそも彼女の衣服を見れば、異文化圏で暮らしていたイシュトの目から見ても、田舎者なのは一目瞭然だった。この洗練された王都に溶けこめていないのは、明らかだ。

手慰みに、一本くらい買ってもよいかと思ったが、自分が文無しであることを思い出し、イシュトは溜息をついた。

「すまん。この世界……いや、この街に流れ着いたばかりで——」

イシュトが断ろうとした、その矢先だった。

「おい！ ぼけつと突つ立ってんじゃねえぞ！」

ひととき大柄な通行人が、少女を乱暴に突き飛ばしたのである。

「ひゃんっ！」

バランスを崩した少女が転んだ拍子に、携えていた花が乱雑に撒き散らされた。その上を、次々と通行人が通りすぎていく。

あつという間に、色とりどりの花は踏みじられてしまった。都会の雑踏の残酷さが、まざまざと感じられた。

「ああっ……！」

地面に這いつくばった少女が、悲痛な声をあげた。

「ん？ なんだ、誤爆エルフのリックじゃねえか！ 花売りにでもジョブ・チェンジしたのかあ？」

リックを突き飛ばした男は、全身の肌が緑がかった亜人種だった。見るからに爬虫類的な雰囲気漂わせている。

戦士系のリザードマンだ。

その身長は二エイル（＝約二メートル）を超えており、筋骨隆々とした体軀に革鎧を装着している。腰には立派なロングソードを佩いていた。

「ははっ！ こいつは傑作だな！ 天職が見つかったじゃねえか！ もう二度と黒魔法は使っじゃねえぞ！ 冒険者の面汚しめ！」

「弟よ、そのへんにしておくがいい。我らはアンデッドの討伐任務を控えている。悪名高い誤爆エルフ、なんぞに関わり合っていたら、縁起が悪いだろう」

と、もう一人の男が、傲岸なりザードマンの背後から現れた。

こちらは魔道士系のリザードマンだった。戦士系リザードマンの兄らしいが、弟よりも頭一つ分は小柄で、ほっそりとしている。

見るからに粗暴な弟とは対照的に、魔道士系の兄は冷静沈着な様子だが、目の前で転んでいるハーフエルフを蔑んでいるという点では、一致しているようだった。

どうやら、花売りの少女——リックと呼ばれたハーフエルフは、嫌われ者らしい。誤爆エ

ルフなどという、珍妙な渾名<sup>あだな</sup>も気になった。

……ふと、イシュトは気づいた。

先ほど戦士系リザードマンは、リッカを「冒険者の面汚し」と呼んだのだ。

ということは、リッカも冒険者ということになる。

本職が冒険者なら、どうしてリッカは花を売ったりしていたのだろうか？ と、イシュトは疑問に思った。

「いいか！ 二度と冒険者ギルドに顔を出すんじゃないぞ！」

戦士系リザードマンは毒々しい捨て台詞<sup>ぜりふ</sup>を吐くと、歩きだした。大柄な戦士が肩をそびやかしつつ闊歩<sup>かつぽ</sup>すると、通行人たちは慌てて道を空けた。そんな弟の背後を、兄が静かに歩いている。

事情はよくわからないが、イシュトは強烈な不快感を覚えた。一方的に因縁をつけてきたと思ったら、リッカが売っていた花を台無しにしたのだ。

「おい、その二匹」

イシュトはリザードマン兄弟の背にむけて、鋭い一声を放った。

「ちょおっ！ てめえ！ いま、なんつった!？」

たちまち戦士系リザードマンが振り返り、イシュトを睨<sup>にら</sup>みつけた。ずんずんと、こちらに引き返してくる。地響きが聞こえてきそうな迫力があつた。

「その二匹、といった」

イシュトは淡々と返しつつ、戦士系リザードマンの顔を見上げた。相手のほうが、頭二つ分は上背がある。

「匹<sup>ひ</sup>じゃねえよ、こらあ！ リザードマンをトカゲ扱いしてんじゃないぞ！」

「ふっ」

イシュトは失笑した。図らずも、相手のコンプレックスを刺激してしまったらしい。

それにしても、このリザードマンは気づいているのだろうか。

いま彼は、その巨体を最大限に活用して、イシュトを見下ろしている。自分がドラゴンにでもなった気分で、偉そうに振る舞っている。

だが、事実は逆だ。イシュトこそがドラゴンであり、たかがリザードマンごとき、まさしくトカゲにすぎない。

ちやうどいいだろう、とイシュトは思った。

この新しい肉体が、どの程度使えるものなのか、試してみたくなったのだ。

たしか魔王時代の自分には、視線に様々な状態異常を付与するスキルがあったと記憶している。いわゆる眼術だ。ベルグントが使っていた<sup>レ</sup>石化の視線<sup>レ</sup>に似ているかもしれない。

「てめえ！ なにを笑ってやる！」

と、戦士系リザードマンが業を煮やし、猛然と襲いかかってきた。腰の剣は抜かずに、殴り

かかってきたのだ。

街中で剣を抜こうとしないあたり、まだ理性は働いているようだ。腐っても冒険者といふとか。

もつとも、武器を使おうが使うまいが、トカゲがドラゴンに勝てる道理はない。

「頭が高い」

イシュトは涼しげにつぶやくと、深紅の瞳を爛々と輝かせた。

互いの視線がぶつかる。

「——!?」

次の瞬間、戦士系リザードマンが全身を硬直させた。振りあげた拳も、ぴたりと停止してしまふ。

「おい、貴様！ わたしの弟になにをした!?」

と、魔道士系リザードマンが金属製の杖を構えつつ、イシュトに問うた。いまにも魔法を使いそうな様子である。

「心配するな。命に別状はない。ちょっとした眼術を——」

イシュトの説明が終わらぬうちに、戦士系リザードマンが動いた。

突然、兄を振り返ると、まるで少女のような仕草で駆けよつたのだ。

「お兄様！ 早く逃げましょう！ あたしたちが敵う相手じゃないわっ！」

「ちよっ！ おい、弟よ！ なにを血迷っている!?」

兄がうろたえるのも無理はない。

弟は著しい変貌を遂げていた。臆病な顔つきで女言葉を話し、なよなよとした仕草で兄にすがりついている。先ほどまでは戦士らしく、肩で風を切りながら歩いていたというのに、いまや内股になっている。

「あのね……ずっと黙っていたけど、あたし、お兄様が好きなの！ 好き好き大好き！ 愛しているわ！ ああっ、お兄様！」

弟は叫ぶと、兄に熱烈なキスをした。あろうことか、唇と唇を重ねたのだ。

「ええ……」

野次馬一同、もはや困惑顔である。だれかが「誰得だよ……」とつぶやいたが、まさしく全員に共通する思いだっただろう。

「おい、貴様あ！ わたしの弟に、なにをした！ こいつは勇猛果敢なりザードマン戦士だったのだぞ！」

魔道士系リザードマンが泣き顔になって、イシュトに文句を飛ばしてくる。

その間もずっと、逞しい弟の熱烈なキスや頬すり、そして抱擁を受けているのだから、こ愁傷様としかいいようがない。

「いや、なんというか……すまん」

イシュトは頭をかきながら、ぼそりと答えた。

「すまんですむかあつ！ ちゃんと説明しろっ！」

「うむ。俺としてはだな、状態異常の一種——「チキン」にしてやるだけのつもりだった。術が成功すれば、お前の弟は臙病風<sup>やうびょうふう</sup>に吹かれて、脱兎のごとく逃げだすはずだった……」

「いやいや、チキンなんてレベルじゃねえぞ！」

「そうだな。俺自身が記憶の一部を失っているせいだろう。どうやら手元——いや、目元が狂ったらしい。おそろくは、「混乱」と「女体化」が勝手に追加されてしまったのだろうな」

イシュトは肩をすくめると、溜息をついた。

「はあああつ!? 混乱しすぎだろう！ というか……女体化だとおおおつ!? そんな状態異常なんて聞いたこともないぞ！」

魔道士系リザードマンは目を剥いた。

事実、弟の肉体には微妙な変化が加わっていたのである。

先ほどまでは筋骨隆々だったはずが、いまでは柔和な印象を帯びている。胸元も、ほのかにふくらんでいる。ということは、下半身は——。

「なんてことをしてくれたんだあつ！ 弟の一生を台無しにしやがって！ いずれは部族を率いる頭領になる男なのだぞつ！ 自慢の弟が……妹になってしまった！」

「問題ない。一カ月もすれば自然に治る……と、思う」

「思う!? なんだ、その無責任な発言は！」

「仕方あるまい。俺自身、まだ自分の能力を把握できていないのだからな。いますぐ治したければ、腕のいい白魔道士にでも解除してもらうんだな。こちらの世界では知られていないようだが、女体化といっても、しょせんは状態異常の一種にすぎん」

「そつ、そうか！ 白魔法で治せるのだな！ いいたいことは山ほどあるが、まずは弟の治療が先決だ！」

魔道士系リザードマンは、弟の執拗な抱擁を受けながらも、なんとか退散した。

「なんだったんだ、一体……」

「あのリザードマン兄弟、名の通った冒険者だったんだがなあ」

「いや、気持ちの悪いもんを見せられたぜ」

と、周囲に集まっていた野次馬たちが口々にぼやきながら、解散していく。

「あつ、あの！ 危ないところを助けていた দিয়ে、ありがとうございました！」

と、リッカが感謝の気持ちを告げながら、イシュトの前で何度も頭を下げた。

「気にするな。俺が勝手にしたことだ」

「それにしても、ふしぎなスキルをお持ちなのですね？」

「いや、まあ……俺自身、困惑気味だな。力の使い方を間違えてしまったようだ……。ところで、お前も冒険者らしいな？」



「あ、はい……一応は」

なぜだか、リックはサツと目を逸らしてしまった。なにやら深い事情を抱えているようだが、そこに踏みこむのは、さすがにお節度だろうと思った。

「冒険者ならば、知っているのではないか？ 『王立冒険者養成校』とやらが、このあたりにあるはずなのだが」

「養成校ですか？ この通りをまっすぐに進めば、すぐですよ」

といって、リックは進行方向を指さした。

「そうか、礼をいう」

イシュトは微笑で応じると、その場を去った。

## 2

本音をいえば、冒険者などになりたくはない。

だが、日々の糧を得ようと思ったら、働かねばならない。

かつては魔王として、なに不自由ない暮らしを許されていたイシュトだが、いまは無名の少年にすぎないのである。

ベルダライン支部長がいうには、この世界で手つとり早く独立しようと思ったら、やはり冒

険者がいちばんだという。そして、冒険者になるためには、ギルド傘下の養成校に入らねばならない――。

リックに教えられた通りに、イシュトは大通りを歩いていく。

やがて、目的地に到着した。

――王立冒険者養成校。

目の前には、いかめしい門扉が屹立している。

広大な敷地の周囲は、ぐるりと煉瓦造りの堀で取り囲まれている。

目の覚めるような芝生のむこうに、二階建ての校舎が見えた。

と、まだ児童の面影を残した少年や少女が、次々とイシュトを追い越し、門をくぐり抜けていった。イシュトと似たような私服姿の者が大半だが、なかにはレザー製や金属製のアーマーを身に着けている者も含まれていた。気の早い連中だ、とイシュトは思った。

なお、講習は毎日のように開催されているという。

入学料及び受講料については、入学時にまとめて支払うコースと、いったんギルドに立て替えてもらい、晴れて冒険者になったあとで支払うコースが設けられているそうだ。

イシュトは文無しなので、後者を選択するように、とベルダライン支部長からアドバイスを受けていた。

「はあ……やむを得ん。何事も経験だ。そうだ、冒険者について研究する好機だと思えばよい

のだ。一流の冒険者が、いずれ勇者となって、魔王を倒しに来る……そうだ、戦略的見地に立てば、敵を知ること重要……うむ、行くぞ！」

無理やり自分を納得させると、イシュトは校門をくぐり抜けた。

最初の一時間はどは、手渡された書類に必要事項を記入しているうちに過ぎ去った。アイリスが後見人になってくれたおかげだろうか。入校申請は、おどろくほどスムーズに終わった。

さて——冒険者になるためには、この養成校を卒業する必要がある。資格取得までに要する期間は、最短でも三カ月。成績が悪いと、一年を要する場合もあるそうだ。

なお、最初に「見習騎士」か「道具士」のどちらかを選択するように、と職員から説明を受けた。前者は戦士系の志望者、後者は魔道士系の志望者が選ぶというが、厳格な決まりはないそうだ。

イシュトは見習騎士を選択した。

### 3

午後になり、いよいよ第一回目の講習が始まった。

敷地内の演習場に集結した生徒たちは、ざっと三十名ほど。

男女比は六対四くらいである。また、全体の七割ほどがヒューマンであり、残りは妖精族や亜人種であった。

「それでは、第一回目の講習を開始する！」

見るからに屈強そうな教官が現れると、挨拶もそこそこに怒鳴った。

つるりと禿げた頭に、太い眉。濃い口髭。割れた顎。頬にはひとすじの古疵が走っている。筋骨隆々な体軀には、年季の入ったレザーアーマー。年齢は五十代の半ばだろうか。まだまだ意気軒昂なので、現役の冒険者かもしれない。

「各々の職業には固有の能力がある。これを『アビリティ』と呼称する。もちろん、見習騎士にだってアビリティはあるぞ！ おい、そこのお前！ なんだかいつてみる！」

唐突に指名され、最前列にいた生徒は震えあがった。

「すみません！ 知りません！」

「罰として腕立て伏せ百回！ お前は予習もしとらんのかっ！」

教官は鬼の形相で告げた。

答えられなかった生徒は、泣きながら腕立て伏せを始めた。

「よく聞け！ 見習騎士のアビリティは投石だ！ 今日早速、投石訓練を始める！」  
 といって、鬼教官は演習場の一角を指さした。投げるのにちょうどいい大きさの石が、大量

に準備されている。一方、そこから離れた位置には、等身大の藁人形が五体ほど並べられている。まさしく訓練施設の趣があった。

「いいか！ 投石をバカにするものは投石に泣く！ たった一つの石ころが血路を開くことだってあるのだ！ 肩が外れるまで——否！ 外れても投げつづける！」

鬼教官の指示で、五人が一組となった。全部で六組。イシユトは書類を提出したのが最後だったので、第六組に編入された。

——ふう……かつたるいな。まるで幼児の遊びではないか。まあ、投石をバカにするな、という教えには同意するがな。

未熟な少年少女たちが投石をする姿を眺めるのは、なんとも退屈だった。

やがて、イシユトを含む第六組の番となった。

五人が横並びとなって、投石を開始する。

等間隔に並べられた藁人形との距離は、約二十エイル。

仕方なく、イシユトも周囲の受講生たちに倣って、足元の小石を拾いあげた。

「……無力な案山子よ、我が足元にひざまずけ！」

呪文のように唱えながら、腕を振りかぶる。もちろん全力を出すつもりはない。遊び半分で、軽く放り投げた。

ひゅんっ！ と風切り音が鳴り——

大爆発が発生した。

青空に響きわたる轟音。

吹き荒れる爆風。濛々と舞いあがる砂煙。

だれもが驚愕し、地面に這いつくばることしかできなかった。あの鬼教官ですら例外ではなかった。

やがて、視界を遮っていた砂塵が収まり、視界が晴れたとたん、鬼教官は度肝を抜かれたように叫んだ。

「なっ！ なんじやこりやあ!?」

尻餅をついた鬼教官をはじめ、受講生たちも啞然としている。

広大な演習場の約半分が破壊され、巨大なクレーターと化していた。

幸いにも、全員がイシユトの真横か後方に位置していたし、他に演習場を利用していた者もいなかった。だれも巻きこまれずにすんだ。

しかし、あの投石が校舎を巻きこんでいたりしたら、あるいは演習場の外で炸裂していた場合は、大惨事となっていただろう……。

「……………」

だれもが恐怖のあまり沈黙した。というより、目の前でなにが起きたのか、正確に把握して

いた者は皆無だったろう。

当のイシュトにしても、

——ひょっとして、俺がやったのか？

と、半信半疑に思ったほどである。

やがて、ふらふらと立ちあがった鬼教官が、震え声でつぶやいた。全身が砂まみれになっている。

「いまのは……もしや究極の黒魔法、メテオライト・オブ・アルマゲドンか!」

歴戦の強者といった雰囲気をもしだしていた鬼教官が、いまではもう、すっかり怯えきっている。

居合わせた受講生たちも、ようやく正気にもどったらしく、ざわざわと私語を始めた。

「本当にメテオ……だったのか?」

「でも、だれがなんの目的で撃ちこんだっていうんだ?」

「こんな養成所を攻撃したところで、だれの得にもならないと思うけどな」

「だって、あの教官がメテオ……といったじゃないか」

「メテオ……といえば、もはや伝説級の大魔法だろ?」

「もし本物のメテオ……だったなら、一生の想い出になるぞ!」

受講生たちの反応をうかがっているうちに、イシュトは事態の重さを理解した。

イシュトにとっては、ただの投石にすぎなかったのだが……まさか、こんな状況を引き起こしてしまうとは、難儀な話である。

不幸中の幸いは、だれもイシュトの仕業だと気づいていないことだろう。実際、何者かが外部から攻撃魔法を撃ちこんだと考えたほうが、よほど常識的である。

そのときだった。

クレーターの底で、異変が生じたのだ。土砂が次々と吹き飛んで、地盤の下からわらわらと異形の怪物が湧きだしてくる。

「あっ! あれはレッドワーム!」

「まさか! さっきの爆発は、レッドワームの仕業だったのか?」

「いや、レッドワームにそんな力はないんじゃない?」

「ごちゃごちゃうるさい! 早く逃げろ!」

目の前のクレーターは、いまやレッドワームの巣窟と化していた。

その気持ち悪い光景を前に、生徒たちは逃走を始めている。さすがに冒険者の卵だけあって、パニックを起こさなかったのは立派だった。

一方、イシュトは投石位置から一步も動くことなく、モンスターの大量を眺めている。

個体差はあるものの、全長は十エイルを超すものが大半である。無数の環節が連なった構造体であり、体表は濃赤色で、てらてらと濡れ光っている。

まさしく、ミミズにそっくりな化け物だった。

ただし、頭部に相当する位置には、円形の唇がそなわっている。その縁に沿って、凶悪な牙<sup>きば</sup>がびっしりと生えており、ただの巨大ミミズではないのだと主張している。あそこに首や手足を突っこんだりしたら、一瞬で噛み千切られるだろう。

「おいっ！ その少年！ お前も早く逃げろーっ！」

避難誘導に徹していた鬼教官が、いまさらながらイシュトに気づき、大慌てで叫んだが、イシュトは黙殺した。

そうこうしているうちに、レッドワームは次々とクレーターから這いだしてきて、イシュトを目がけて殺到した。

まるで、真<sup>ま</sup>赤な大波<sup>か</sup>が迫るような光景だった。

「ふん。数は多いが、単体の戦闘力はドラゴンの足元にも及<sup>およ</sup>ばんか」

イシュトは冷静沈着に、足元の小石を拾いあげた。

訓練用の小石は、その大半が受講生たちに使われていたが、かろうじて五つほどが残っている。

それだけあれば、イシュトには充分だった。

イシュトはにやりとした。

いまの自分がどの程度戦えるのか、改めて試すチャンスだと確信したのだ。

「蟲<sup>むし</sup>どもよ！ 俺を魔王と知<sup>し</sup>つての狼藉<sup>ろうぜき</sup>か！」

イシュトは一喝すると、投石した。

その石ころが大群の中央に到達するやいなや、またしても大爆発が発生した。

大半の蟲は、跡形もなく消滅してしまう。かろうじて直撃を免れた蟲にしても、ある個体は空中に吹き飛ばされ、ある個体は地底に叩き落とされた。

それでも、レッドワームの群れは知能が足りないのか、次から次へと地上に這いだしてくる。先ほどの一撃で数十匹は始末したはずだが、あつという間に補充されてしまった。

「よかろう。とことん付き合<sup>あ</sup>ってやる」

イシュトは嗜虐<sup>しやくやく</sup>的に嗤<sup>わら</sup>うと、次の石を手にとった。

## 4

「バカな！ なにが起きている……？」

受講生たちを避難させながら、禿頭<sup>とくとう</sup>の鬼教官は戦慄<sup>せんりつ</sup>していた。

いつものように投石の講習をしていたところ、突然、大魔法級の大爆発が発生し、訓練施設の半分ほどをクレーターに変えてしまった。

それだけでも異常事態だというのに、今度はクレーターの底部を突き破って、下水道に巢

くつていたレッドワームの群れが這いだしてきた――。

「そつ、そつだ！ まだ一人、受講生が残っていたはずだが！」  
そのとき、鬼教官は見た。

レッドワームの大群が、新たに発生した大爆発により、吹き飛ばされたのだ。そして粉塵が晴れた頃、投石位置を示す白線のあたりに、一人の少年が余裕たつぶりの表情でたたずんでいた。

「あの受講生、何者だ!？」

漆黒の髪に、深紅の瞳。見るからに線の細い少年だが、彼が小石を投げた直後、さらなる大爆発が発生した。

「まさか！ 一度目の爆発も、彼の仕業だったのか!? たかが投石で、あの威力……とんでもない逸材だ！ 彼こそ次代を担う冒険者……そうだ、《勇者》にだってなれる存在だ！ 彼といい、アイリス殿といい、次世代は人材に恵まれている……!」

切迫した状況も忘れて、鬼教官は称賛の声をあげたのだった。

イシュトが足元の小石をすべて投擲し終えたとき、レッドワームの侵攻は収まった。

すでに演習場の土壌は根こそぎえぐられて、惨憺たる状況になっている。校舎と防壁が残存しているのが奇跡のように思えるが、もちろん、イシュトが自分なりに威力を加減した結果

である。

イシュトは戦闘中にもかかわらず、一度目の投石を基準点にして、自分の能力を探っていたのだった。

「ふん、他愛のない連中だ」

イシュトがきびすを返そうとしたそのとき、轟音が響きわたった。

地面が揺れたほどだ。

これまでのレッドワームとは比較にならない、巨大な個体が地盤を突き破って現れたのだつた。

環節体の大半は、まだ地下空間に収まったままであり、その全貌はうかがいしれない。一般的なレッドワームと違い、その体表面は硬そうな外殻に覆われている。

「あれはキングワームだ!」

という叫びが、どこからあがった。

「ふん。やつとボスのお出ましか。たとえ虫けらといえども、キングの称号を持つ者ならば、丁重に出迎えてやらねばなるまい。互いに『王』を名のる者同士、心ゆくまで殺し合おうではないか」

イシュトは、にやりとした。

と、意外な迅速さで、キングワームの頭部が迫りくる。

円形の唇が大きく開き、びっしりと生えそろった牙が見えた。牛馬をも丸呑みできそうな大きさだった。

イシュトは『異世界百科』を使った。すぐさま網膜に各種情報が表示される。

キングワームは有名なモンスターらしく、かなり詳しい情報を得ることができた。

「……ふむ。あの外殻の硬度は、金剛石に匹敵するというのは……なかなか厄介だな。ならば、内側から攻めるとするか」

イシュトは身をかがめると、キングワームの肉迫を回避するのではなく、あえて正面衝突を狙って跳躍した。

瞬時にして、キングワームの口腔に飛びこむ。

イシュトの全身が唇を通過した直後、見るからに凶悪な牙がちりと噛み合わされた。一瞬、イシュトはふくらはぎに軽い衝撃を覚えたが、痛みはなかった。

背後を振りかえると、キングワームの牙が無惨にも折れていた。どうやらイシュトのふくらはぎを噛もうとした直後、折れてしまったらしい。

「ほう。物理攻撃も完全に防ぎきったか。見た目はヒューマンそのものだが、なかなか便利な身体だな」

イシュトは苦笑を洩らしつつ、腰を上げた。

キングワームの口腔は、真つ暗で、生臭く、ヌメヌメとしている。思わず顔をしかめた。

魔王の瞳には暗視スキルがそなわっているのだが、ヒューマンとなった身体にも継承されていた。深い闇に包まれていようと、周囲の状況を容易に把握できる。

「ぐっ、生臭いな……さっさと倒して、脱出しなければ」

『異世界百科』によれば、闇雲に攻撃したところで、キングワームはなかなか死なないそうである。肉体の大部分は腸管で構成されており、適当に切断しても死ぬことはない。

となれば、脳をつぶすのが手つとり早い。もちろん、脳の位置は検索済みだ。

「……ミズの王、よ、覚悟はいいか？」

イシュトは悠然と問いかけると、真上にむかつて跳躍した。

粘膜に激突する寸前、右の拳を突き上げる。

鈍い感触と同時に、視界がクリアになった。イシュトの全身は、キングワームの粘膜を突き破り、内臓らしき物体を破壊し、肉も貫通し、そして最後に環節の隙間を縫うようにして外殻を破り、外に飛び出したのだった。

その勢いは留まるところを知らず、いまやイシュトの身は空中にあった。

街がミニチュアのように小さく見える。

空は青く、澄みわたっている。突然、空に投げだされたような感じがした。

イシュトは降下しつつ、王都を一望した。

「ははっ！ 良い眺めだ！」

喝采<sup>かつさい</sup>をあげながら、穴ぼこだらけの演習場に着地する。

軽い衝撃に襲われたが、身体に異常はない。

常人であれば、地面に激突して即死していただろうに、なんともない。

イシュトが宙を舞っている間、ずつと硬直していたキングワームは、やがて地響きとともに転がった。自分が死んでいることを、ようやく思い出したかのようだった。

イシュトの一撃は、キングワームの脳を見事に破碎したのである。

「クミミズ<sup>クミミズ</sup>の王<sup>クミミズ</sup>よ、安らかに眠れ」

イシュトは毅然<sup>きぜん</sup>として告げると、きびすを返そうとしたが——さて、これからどうすればよいのか、まごついてしまった。

「そういえば……まだ講習の途中だったな」

遅まきながら、市街地には警鐘がけたたましく鳴り響き、災害の発生を住民に知らせている。本来ならば、兵士あるいは冒険者が一丸となって当たるべき任務を、イシュトはたった一人で片づけてしまった。しかも、使ったのは石ころと拳だけだった。

と、そこに物々しい装備に身を固めた冒険者たちが殺到した。

「モンスターはどこだ!？」

「キングワームが出たと聞いたが?」

「おい、あれって……キングワームの死骸じゃないか?」

勇躍して駆けつけたというのに、冒険者の一同は面食<sup>めんしょく</sup>らった様子である。

そのとき、イシュトの前に、例の鬼教官が駆けつけてきた。

「おいつ、その受講生! 待てくれ!」

まさしく鬼の形相で、教官はイシュトを睨みつけている。

「……なんだ?」

イシュトが面倒くさそうに応じると、突然、教官は破顔した。

「見事な戦いぶりでありました! お名前をうかがっても、よろしいでしょうか?」

イシュトは面食<sup>めんしょく</sup>らった。

教官は満面の笑みを浮かべている。先ほどまでの厳格さはどこへやら、鬼の表情は霧散して、まるで王侯貴族にかしづくように、恭<sup>うやうや</sup>しい態度になっていた。

「……イシュトだ」

「イシュト殿ですな! 素手でキングワームを倒すなど、前代未聞ですぞ! それに、あの投石! あれほど見事な投石は、いまだかつて見たことがありません!」

教官は感涙<sup>かんだい</sup>さえ浮かべて、イシュトの手を握りしめた。いかつい壮年男に手を握られて喜ぶような趣味はないので、イシュトはさっさと帰宅したい衝動に駆られてしまった。

と、教官の声を聞きつけ、冒険者たちや受講生たち、さらには養成校の職員や、往來の野次馬たちまでが、ぞろぞろと集まってきた。



「皆の者、聞くがよい！」

と、教官が得意げに宣言した。

「すべては、こちらの少年——イシュト殿の手柄なのだ！　まだ冒険者の資格すら得ていない少年が、たった一人でレッドワームの群れとキングワームを討伐したのである！」

たちまち、その情報は周囲に伝播して、イシュトは注目の的となった。

「なんなのだ、この状況は……」

イシュトとしては、軽い運動のつもりだったのだが。

——大体、こいつらはなにを喜んでるのだ？　俺に手柄を横取りされたわけだから、むしろ、この場で俺を倒して、手柄を横取りしたいと考えるのが普通ではないのか？　チヨロいというか、なんというか、よっぽど能天気なお国柄らしいな……。いや、待てよ。もしかしたら、俺を油断させるために演技をしているのか？　だとすれば、侮れん。警戒しておかねば……。

そんなことを思いつつ、イシュトは称賛の嵐を浴びつづけた。

「よくやった！　ありがとう！」

「大型新人の誕生だ！」

「イシュト殿の伝説は、ここから始まるのだっ！」

拍手喝采は、なかなか終わらずにない。

いつしかヒーロー・インタビューが始まり、握手会へと移行し、ついには胴上げしようという流れになったが、

「ええい、やめんか！」

イシュトが頑として断ったので、胴上げだけは未遂に終わった。

## 5

一騒動を終えたのち、イシュトは鬼教官——いや、もはや軟化したので、ただ禿げているだけの教官に連れられて、校長室にむかった。

校長からも称賛の嵐を浴びるのだろうか。

いや、あるいは……イシュトの投石で演習場は壊滅的な打撃を受け、もはや見る影もないのである。弁償しろといわれても、反論の余地はない。

だが、魔王時代ならいざ知らず、いまのイシュトに払いきれはるはずもない。そもそも個人でどうにかできる金額ではないだろう。

「校長！　例の少年を連れてきましたぞ！」

と、教官が校長室の扉を豪快にノックした。

「おおつ、お待ちしていました！　さあさあ、お入りください！」

扉ごしに返事があったので、教官は勢いよく扉を開き、イシュトをいざなつた。  
イシュトを出迎えたのは、白髪の老人だった。ちんまりとした、いかにも好々爺こうこうやといった雰  
囲気をまとっている。ローブを着用しているところを見ると、魔道士らしい。

目を通していた書類を机に置くと、老人はにつこりとした。

「私が当校の校長です。遠慮せず、そこに掛けてください」

イシュトはしかたなく、椅子に掛けた。

「貴公のご活躍は、すでに報告を受けております」

「うむ。それで？」

「貴公ほどの実力があれば、どこの国の軍隊であろうと、大喜びで受け容いれるでしょうに……  
それでも、あえて冒険者になるべく、当校に入学された。そうですね？」

「いや、まあ……なんというか、成り行きでな」

「謙遜する必要はありません。正直な話、もはや当校では、あなたほどの猛も者に教えること  
はなにもない——というのが、私が出した結論です」

「なんだ。つまりは、退学か」

イシュトは安堵あんどした。

これで冒険者にはならずにすむぞ、と思ったのも束の間、

「いえいえ、卒業です」

「卒業だと？」

イシュトは眉根を寄せた。

「待て待て。最短でも、受講期間は三ヵ月だと聞いているが？」

「ええ。ですが、貴公と他の受講生たちとは、あまりにも能力差がありすぎて……大人しい  
羊が群れている草原に、血に飢えたドラゴンを解き放つようなものです。おっと、この喩たとえ  
は失礼でしたな。とにかく、貴公と他の受講生とは、まったく釣り合いがとれません。とい  
うわけで——」

校長は席を立つと、こちらに歩み寄ってきた。そして、イシュトの手をギュッと握り締めた。

「ご卒業、おめでとうございます。貴公に軍神レイオスの御加護があらんことを」

「本気でいっているのか……？」

……というわけで、イシュトは王立冒険者養成校を卒業した。

入学したその日に卒業するという、前代未聞の記録を残して——。

## QUEST 4 「こちらが、イシュトさんの冒険者証になります」

## 1

王都アリオスの繁華街は不夜城として知られ、一晩中、街の灯りが絶えることはない。

魔法の力で輝く常夜灯が、たっぷり稼いだ冒険者たちを次々と迎え入れる。

劇場、料理店、酒場、賭博場、高級旅館、そして娼館……今夜も、街は大いに賑わっていた。

そんな華やかな大通りからは遠く離れた路地裏に、小さな店がある。

店名は〈妖精の隠れ家〉。

知る人ぞ知る店であり、看板の類は掲げられていないので、それなりに遊び慣れた者であっても、まず知らないだろう。

老朽化した安宿の地下にある、小さな食堂だ。客席といえば、三人掛けのカウンター席と、テーブル席が一つ用意されているだけだった。

カウンターのもこうに立つ店主は小人族の老人であり、ほとんど喋らない。

夜の九時頃、この店を団体客が訪れた。

先頭は、オルタンシア・レメイ・ベルダライン。狐系の獣人族であり、冒険者ギルドの王都支部長を務めている女傑だ。

つづいて、王都で評判の冒険者バーティー「銀狼騎士団」の全メンバー——アイリス、ラッツェ、ルテッサ、魔女ゲルダ、そして聖獣クルルが扉をくぐった。

ベルダラインとゲルダとアイリスがカウンター席に、残る三人はテーブル席に着いた。そして、クルルは床にごろりと寝そべった。

この店は、ベルダライン支部長のお気に入りであり、他人に聞かれない話をするときは、決まって利用するのだ。

今宵もまた、秘密の会合が始まる。

「いやー。愉快愉快。冒険者ギルドはイシュト君の噂で持ちきりだよ」

蒸留酒をグイッと呷るや、ベルダラインが笑った。

すでに、ほろ酔い気分の彼女は、エキゾチックな着物の帯をゆるめている。生地の内側にこもった熱気を追いだすように、真っ白な撫で肩を露出させていた。

「支部長。いくら馴染みの店とはいえ、だらけすぎでは……?」

カウンター席の中央に着いたアイリスが、半眼で注意するも、

「いいじゃないか、アイリス嬢。どうせ僕たち以外に客はいないんだしね！」  
ベルダラインは一笑に付した。

「その牝狐に人並みの倫理を求めても無駄ですよ、アイリス。非常識と破廉恥が服を着て歩いているような女ですから」

「くっつ！ 相変わらず、ゲルダの言葉責めは辛辣だなあ。でも、そこがいい！」

「そっちは相変わらず、変態ですね」

「最高の褒め言葉だよ！」

「……ところで、支部長。そろそろ、例の物を見せてほしいんだけど」

こちらへんで軌道修正しておかないと、いつまで経っても本題に入れないと悟ったアイリスは、強引に話題を変えた。

「ふふっ。目の玉が飛びでるほどおどろくと思うよ」

ベルダラインは微笑をこぼすと、豊かな胸の谷間に指をつつこんだ。そして、細く巻いた羊皮紙を取り出した。

今日の昼間、王都アリオスの市街地に、警鐘がけたたましく鳴り響いた。

そのとき、アイリスは私事に追われていた。

午後に予定されている「昼食会」に出席する間際だったのだ。

冒険者としての癖で、アイリスは腰を浮かした。が、いつも手元に置いてあるはずの愛剣は、専属騎士のランツェに預けていた——。

やむを得ず、アイリスは予定通り「昼食会」に参加した。参加者たちは、「街中で火災でも発生したのかしら？」などと噂していた。

あの警鐘の原因が、実は火災などではなく、ワーム系モンスターの大量発生だったと聞いたのは、活動拠点としている宿酒場に帰ってきた直後である。

冒険者たちの間では、昼間の事件の話題で持ちきりだった。

アイリスは悔いた。

市内にモンスターが侵入するなど、非常事態もいところだ。あの「昼食会」さえなければ、アイリスも現場に駆けつけていたはずだったのに……。

だが、よくよく話を聞いてみると、意外な事実が判明した。

なんでも、たった一人の少年が、百匹以上のレッドワームと、一匹のキングワームを瞬殺してしまったのだという。

しかも、その少年は冒険者の養成校に入学したばかりだったらしい。

その話を聞いたとたん、アイリスは直感した。

——イシュトだ、と。

その後、アイリスたちは、ベルダライン支部長から呼び出しを受けた。なんでも緊急の用事

があるので、《妖精の隠れ家》に来てほしいという。  
そして、現在に至る――。

ベルダライン支部長が見せてくれた羊皮紙には、「冒険者イシュト」のステータス情報が記録されていた。

冒険者を志す者は、なにをおいても王立冒険者養成校を卒業せねばならない。

晴れて卒業すると、まずはギルドで各種検査を受けることになる。魔法の力で、冒険者としての各種能力値を解析されるのだ。

こうした数値化に批判的な意見もあるが、その一方で、冒険者の死亡率が格段に減ったのも事実だった。

「いや、傑作だったよ！　なんせ、入学するために出かけていったはずのイシュト君が、その日のうちに、卒業証書を持って帰ってきたんだからね。前代未聞さ！」

アイリスとゲルダがイシュトのステータス情報を確認している間にも、ベルダラインは陽気に喋り続けている。

「王立冒険者養成校の歴史において、最短で卒業したのはアイリス嬢だったよねえ。たしか一ヶ月くらいだったかな？　もつとも、当時の君は十歳のお子様だったから、単純に比較するわけにはいかないけど」

そのとき、ゲルダが紙面から顔をあげた。

「……信じられません」

表面的にはわかりづらいが、その横顔からは動揺が感じとれる。

「うん。これは異常だね」

アイリスも同意する。

そんな二人の反応を見て、ベルダラインはやりとした。

「いや、笑っちゃうよね。まずは冒険者レベルを見てごらんよ」

「レベル0……？　こんなの、見たことも聞いたこともない」

アイリスは呆然としている。

「通常、冒険者レベルは1からスタートするはず。解析魔道士のミスという可能性は考えられませんか？」

と、ゲルダが慎重な意見を述べた。

「僕もね、最初はミスを疑ったんだけど、解析魔法に問題はなかったそうだよ。イシュト君のレベルは、たしかに0だという。それがなにを意味するのかは、僕にもわからない。現時点で判明しているのは、彼の全能力値が上限に達していることくらいかな」

「じゃあ、彼の実質的なレベルは……？」

アイリスが尋ねると、ベルダラインは肩をすくめてみせた。

「想像もつかないね」

レベルとは、冒険者の大まかな実力を推し量るのに便利なパラメーターだ。冒険者ギルドが発見した解析魔法によって、新たに生まれた概念である。

レベル1から4までを初級冒険者と呼称する。

レベル5から9までが中級。

レベル10を超えると上級と見なされる。

冒険者の大半は、レベル6から8あたりで年齢的な限界を悟り、やむなく引退する。そのため、上級冒険者は稀少な存在であり、敬意をこめて「二桁」と呼称されることもある。

それにしても、イシュトのステータス表ときたら……レベルの他にも、おかしい点が多々あった。

「このスキル欄はなに？ これも明らかに変だよ」

と、アイリスは指摘した。

「あー。文字化けしちゃってるね。獲得スキルの数が多いので、解析しきれなかったんだろうさ。どんなスキルを使えるのかは、本人を地道に観察するしかないさそうだね」

「アラインメントの数値にしても、異常です」

と、今度はゲルダが指摘する。

「そうそう！ 一番の傑作はそれだよ！ 清々しいくらいに、彼はカオス・サイドの住人

すがすが

だよ！」

ベルダラインは大笑いすると、ぐいっと蒸留酒を呷った。

「ぶはーっ！ どんな悪人であろうとも、少しは秩序の要素を有しているものさ。かれこれ数百年の間、僕だっていろんな連中を見てきたけど。どんなに極悪非道な奴でも、混沌の値は75くらいかな？」

「まあ、そんなものですね」

と、ゲルダがうなずいた。

「歴史上、もつとも有名な暴君ですら、80が関の山だろうさ。ところが、だ。イシュト君ときたら、文句なしの百点満点！ いや、長生きはしてみろんだねえー！」

「そういう台詞を口にすると、本当の歳がバレるよ？」

アイリスが忠告するも、ベルダラインは聞いてもいなかった。この支部長の実年齢については、アイリス自身、よく知らない。かつてはゲルダとパーティーを組んでいたという。

「まあ、アラインメントは極めて曖昧な概念だからね。カオスの数値が高いからといって、すぐさま悪につながるというわけでもない。過去、カオスの値が高かった人物が、英雄になった例も少なくないしね。逆に、ロウの値が高かった者が悪の道に進んでしまった例なんて、掃いて捨てるほどある」

「肯定します。数字は嘘をつきませんが、真実とも限りません」

ゲルダが淡々とつぶやいた。

と、ベルダラインが悪戯いたずらっぽい微笑を浮かべつつ、アイリスを見た。

「そういえば、アイリス嬢が冒険者になった当時も、おどろかされたよね。君は君で、アラインメントがロウ・サイドに振りきれている。頼もしいような、危なっかしいような」

「そんなことをいわれても、自分ではよくわからないし」

「そう、アラインメントに関していえば、アイリスも極端なのである。」

——わたしとイシュトは、正反対……？

それがなにを意味するのか、アイリスにはわからない。

「だからこそ、ゲルダが見ているのです」

と、ゲルダがきっぱりと断言した。

こういふとき、魔女ゲルダは決まって、アイリスの保護者のような顔をする。

見た目は十歳の女の子にしか見えないが、その瞳は深い。地獄の底まで見透かすような瞳だった。アイリス自身、ゲルダの実年齢は聞かされていないが……噂では三百歳以上ともいわれている。

「そういえば、例の特別遠征についてだけど。報告書を読ませてもらったよ。危うくアイリス嬢も死にかけたそうじゃないか。一体、ゲルダはなにをしていたんだい？ 君が本気を出して

いたら、ベルグント一匹くらい楽勝だったはずだろう？」

アイリスが物思いにふけっている間に、話題は特別遠征の件に変わっていた。

「それでは、アイリスの成長につながりませんか」

真横でアイリスが聞いているにもかかわらず、ゲルダは淡々と答えた。

「さすがは魔女ゲルダだね。食えない女さ」

「といって、ベルダラインがけられらと笑う。

「食えないのは、お互い様です」

ゲルダはプイッと横をむいてしまった。

「それはともかく、イシュト君を野放しにしておくわけにはいかないな」と、ベルダラインが鋭い目をした。

「そこは同意します」

ゲルダはうなずくと、懐ふところから一冊の本を取り出した。表紙はボロボロで、紙はすっかり黄ばんでいる。いかにも古文書といった趣だ。

「……これは？」

ベルダラインがふしぎそうにつぶやくと、その本を手にとった。アイリスにとっても、初めて見る書物だった。

「魔女ブリガンの予言書です。写本ですが」

「ブリガンといえば、君のライバルじゃないか。百年以上、いがみ合っていたよね」  
 「むこうがゲルダを一方的に敵視してただけです。迷惑千万でした」

「たしか、数年前に亡くなったと聞いたけど？」

「寿命でしょう。それより、十三頁を開いてくれますか？」

ベルダラインは興味津々の顔をして、文面に目を通した。

アイリスも横から覗きこみ、文章を読み取った。

大陸暦九九九年 暗黒神バルバロッサが統べる月  
 紅き月が真円を描くとき 世界の門が開きて

天より《恐怖の大魔王》が舞い降りる

「大陸暦九九九年……今年じゃないか」

と、ベルダラインが鋭い目をした。

「暗黒神バルバロッサが統べる月というのは、閏月のことだよな？」

アイリスが指摘すると、ゲルダはうなずいた。

「ですね。今年は、宮廷占星術師が四月を二回繰り返すと決めましたから」

「イシュト君が発見された夜といえば、真つ赤な満月が輝いていたんだっけ。これについても、

ぴたりと符合するね。おどろいたなあ」

「そういえば、あの紅い月はなんだったの？ わたしは初めて見たけど」

いまださながら、アイリスが疑問に思っただけで尋ねると、

「残念ながら、原理は判明していません。ですが、過去にも同じような現象は記録されていますので、自然現象の一種でしょう」

ゲルダは教師のように解説してくれた。

「はっ！ 魔女ブリガンの占いが当たっているなら、イシュト君は《恐怖の大魔王》になっ  
 てしまうというわけか。まるでお伽噺だなあ！」

ベルダラインは愉快そうに笑った。

「そういえば……イシュト自身が、自分を『魔王』だといってたよね」

アイリスが指摘すると、ベルダラインは微笑を浮かべた。

「さすがに、あの供述を鵜呑みにするわけにはいかないよねえ。まるで十代の少年に特有の妄想みたいというか」

「でも、嘘はついてなかったんだよね？」

アイリスが念を押すように確認すると、ベルダラインはうなずいた。

「ああ。知っての通り、あの天柝は聖遺物の一種だね。どんな嘘も見抜くことができる。少なくとも、イシュト君は本気で自分が魔王だと信じこんでいる。まあ、僕も永年、いろんな冒



「陰者を見てきたけど……一風変わった人物なのは間違いない」

「だね……」

「それにしても、珍しいこともあるもんだ」

と、ベルダラインが意味深な笑みを浮かべつつ、アイリスの顔を覗きこんだ。間髪を容れず、ぺろりと舌を出す。百戦錬磨のアイリスですら、これには虚を衝かれた。

頬をぺろりと舐めあげられた瞬間、背筋が凍りつく思いがした。

「なっ、なにをするの？」

腰を浮かしたアイリスを愉しげに眺めつつ、

「アイリス嬢が特定の男子に興味を抱くなんて、一度もなかったことだろう？」

と、ベルダラインは指摘した。

「べつに、深い意味はないよ。ただ、イシュトの強さには、どうしようもなく惹かれて……と思う。わたしもイシュトのようになりたいっていうか。彼が拳の一撃でベルグントを倒したとき——心が震えたの」

自分でも把握しきれしていない気持ち、アイリスがたどたどしく伝えた直後、

「アイリス様っ！」

鋭い呼び声とともに、ガタン！ と騒音が鳴った。テーブル席のランツェが立ちあがった拍子に、椅子を倒したのだった。

「お立場をわきまえてください！ この馬の骨ともわからん男に興味を抱くなど、貴女にお仕える騎士として、見すごすわけにはまいりませんよ！」

「だから、そういう意味じゃなくて……」

困惑するアイリス。

と、バクバクと料理を頬ばっていたルテッサが、助け船を出してくれた。

「ランツェ、少しは落ち着きや。あんたが絡むと、話がややこしゅうなるやろ。ほれ、このローストチキン、絶品やでー」

「ルテッサ、お前は黙ってる！」

「はあ……ランツェの過保護っぷりにも困ったもんな。そもそも、アイリスちゃんから年頃の女の子なんや。恋の一つや二つ、あってもええんとちゃうんか？ 冒険のことしか頭になかったアイリスちゃんが、生まれて初めて男に興味を持ったんや。うちらとしては、むしろ祝福すべきやと思うけどなあ？」

「お前がいうか！ 色気よりも食いが勝っているお前が！」

「なんやてランツェ！ うちが本気を出したら、男の一人や二人——」

「はっ！ そんな幼児体型で、よくいう！」

「そういうあんたは、せっかくエロい身体しとるくせに、男日照りやないか！ 宝の持ち腐れやで！」

「……って、ルテッサはランツェの乳房を無造作につかんだ。

「きゃあああつ！ なつ、なにをするのだ!?」

「あれっ？ 意外に、かわええ反応やな？」

「うっ、うるさい！ とにかく、わたしはアイリス様にお仕える身だ！ この身も心も、アイリス様に捧げ尽くしている！ 男など不要だっ！」

ランツェとルテッサの口論を苦笑まじりに眺めつつ、ベルダラインが口を開いた。

「ま、海千山千の魔女が遺した予言なんてものは、話半分に聞いておかないとね。魔女なんてものは、なんの根拠もない戯言を、いかにも本当らしく飾りつけるのが得意な生き物なんだからさ」

「……むう。あんなのと一緒にされるのは、迷惑です」

「おっと、ゲルダも魔女だったね。これは失敬！ とりあえず、魔女ブリガンの予言は念頭に置いておくよ。なにかの手がかりになるかもしれないからね」

「……って、ベルダラインは古文書をゲルダに返却した。

「……と。君たちに、相談があるんだけど」

「……にきた——とアイリスは思った。

身構えた、といつてもいい。

過去の経験上、この支部長が持ちかけてきた相談事の大半は、ろくでもない内容ばかりだっ

たのである。

「君たち『銀狼騎士団』には、心から期待しているんだ。白騎士<sup>クロスヴァイセ</sup>のアイリス嬢、重槍騎士<sup>ヘヴィ</sup>のランツェ、ハイエルフのルテッサ、聖獣クルル、そして——魔女ゲルダ。錚々たる顔ぶれだよ」

「おだてたって、なにも出ないからね？」

と、アイリス。

「気をつけてください、アイリス。これは……ろくでもない相談の前ぶれです」

ゲルダも半眼になっている。

「そこで、君たちに相談だ！ 君たちのパーティーに、イシュト君を加入させてはもらえないだろうか！ なんといいっても、あれほどの実力者だ。人畜無害だと確信できるまでは、監視役が必要だろうと思うんだよね」

「支部長殿、申し訳ありません。その依頼には応じかねます！」

速攻で拒否したのは、ランツェだった。ルテッサと口論していたはずなのに、いまやベルダラインに肉迫している。

「ど、どうしてだい、ランツェ？」

「銀狼騎士団は男子禁制です！ イシュヴァルト・アースレイの入団は絶対に認められません！ 万が一、アイリス様に変なムシがついたりしたら、どう責任を取るおつもりで!? わた

しの首はおろか、支部長殿の首も差しだしてもらうことになりますよ！」

「ちよっと、ランツェ。いくらなんでも、大袈裟すぎ——」

「アイリス様！ いまは、わたしと支部長殿が話しているのです！ 口を挟まないでいただきたい！」

アイリスは溜息をついた。長い付き合いなので、ランツェの性格は知悉している。こうなると、梃子でも動かさないだろう。

アイリス自身は、ベルダラインの提案に魅力を感じていたのだが……とても、いいだせる雰囲気ではなかった。

「はあ……。相変わらずだなあ、ランツェは。ま、イシュト君への対応については、僕なりに考えてみるよ。とりあえず、明日の朝にはイシュト君の冒険者証が完成する。すべては、それからさ——」

さすがの支部長も、ランツェの石頭ぶりには降参を余儀なくされた。

その後は他愛のない雑談となり、夜も更けた頃、秘密の会合はお開きとなった。

## 2

まばゆい朝陽がカーテンの隙間から射しこんで、イシュトの目蓋を刺激する。

「……もう朝か」

ゆっくりと目を開く。

真っ先に視界に飛びこんできたのは、見慣れない天井だった。

薄汚れていて、片隅には蜘蛛の巣が張っており、見るからに貧相だ。魔王城の寝室とは比較にもならない。調度品といえは、簡易ベッドくらいである。

思わず「ここはどこだ!？」と声をあげてしまったが、すぐに思い出した。

ここは冒険者ギルド王都支部に隣接する、簡易宿泊施設である。

宿泊費はギルドが立て替えてくれた。いろいろと訳ありな連中を、ギルドが一時的に保護するための施設らしい。

昨日、入学初日にして養成校を卒業してしまったイシュトを出迎えたベルダライン支部長は、事情を聞くなり、腹を抱えて笑ったものだ。

その後、各種手続きをすませ、さらには各種検査を受けていたら、日が暮れてしまった。そこで冒険者ギルドが手配したのが、この宿屋だったのである。

イシュトにとって、こんな木賃宿に泊まるのは初めての経験だった。

隣室からは耳障りな騒音が聞こえてくるわ、隙間風はひゅうひゅうと吹きこんでくるわ、腐りかけた床板の上を正体不明の虫が這いまわっているわで、とても寝つけそうにないと思って

いたが……昼間に運動したおかげか、あっさりと眠りに就いたのだった。ベッドを抜けだすと、窓際に立つ。窓を全開にして、澱んだ空気を追いだした。眼下の街並みを眺めやると、今朝も様々な種族が行き交い、大いに賑わっている。

「平和な朝だ……前世とは大違いだな」

イシュトは思わず、感慨にふけてしまった。

王子時代、そして魔王時代を通じて、イシュトの日常生活は戦場さながらの様相を呈していた。

なかでも筆舌に尽くしがたいのが——女難だった。

とかく魔族の女たちときたら、自己主張が強く、己の欲望に忠実で、あわよくばイシュトを籠絡してやろうと狙っていたのである。相手が魔王だからといって、畏れる様子は微塵もなかった。

イシュトの子胤を宿した宮廷女官の地位は、飛躍的に上昇する。

王妃の座も夢ではないし、たとえ愛妾であっても、将来は安泰である。

熾烈な競争であった。

彼女たちは、あの手この手でイシュトを籠絡すべく暗躍した。特に、イシュトにとんでもない淫夢を見せたがるサキユバス女官たちの攻撃には、辟易したものである。

そんな事情もあって、イシュトは魔族の女たちが苦手だった。いつしか寝室に強力な結果を張り、節操のない宮廷女官を遠ざけることで、貞操を守り抜いたほどである。

見るに見かねた重臣たちは、

「このまま三十歳の誕生日をお迎えになったら、妖精さん々になっちゃいますぞ！」

と、口を酸っぱくして諭したもののだが、イシュトは「そんなものは迷信だ」と決めつけ、山に引きこもった修行僧のごとく、頑として女官たちの誘惑を拒んだ。

そうこうしているうちに、先代魔王が病死し、七十二名の兄弟姉妹による王位争奪戦が始まった。もはや色恋沙汰どころではなくなった……。

王位争奪戦を制したイシュトは、見事、王位に就いた。

折しも戦時中だった。イシュトは辣腕を振るい、魔王としての資質を存分に示した。

だが——即位して六六六日目。

三十歳の誕生日を目前に控えた、その日。

魔王城に潜入した勇者たちによって、第二代魔王イシュトは討伐された——。

「……一度は死んだと思った。すべてが終わったかと思った。だが違った。むしろ俺の人生は、これから始まるのかもしれないな」

そうつぶやくと、イシュトは目の前で拳を握りしめた。

そのとき、扉が遠慮がちにノックされた。

「……イシュトさん。お目覚めでしょうか？」

扉越しに聞こえてきたのは、若い女の声だった。

敵意は感じられない。それでも、イシュトはサツと身構えた。

「だれだ!？」

「冒険者ギルドの者です」

「ギルドだと?」

イシュトは顔をしかめながらも、扉の鍵を開けた。掛け金を押しあげるだけの、簡素な仕組みだった。防犯という見地に立てば、最弱クラスであろう。もつとも、勇者たちの潜入を許した魔王城もまた、防犯体制はガバガバだったわけだが……。

「……入るがよい」

イシュトが声をかけると、扉が開いた。入ってきたのは、冒険者ギルドの制服に身を包んだ女だった。

「——!」

不覚にも、イシュトは彼女の美貌に目を奪われた。

ブロンドの髪を丁寧に結っており、清潔感がある。制服をきちんと着こなしているので、大人っぽい雰囲気漂わせているが、その顔立ちには、まだ少女の面影があった。

年の頃は十七、八だろうか。ほっそりとしているが、胸元は豊かで、否応なしにイシュトの目を引きつけた。

「おはようございます、イシュトさん」

女は礼儀正しく頭を下げると、自己紹介をした。

「わたくし、冒険者ギルド王都支部のエルシィ・ノワと申します。本日付けをもって、イシュトさんの担当官を務めさせていただきます。普段は王都支部の受付にいますので、なにかご不明な点などありましたら、遠慮なく聞いてくださいね」

「待て。それは宮廷女官のようなものか?」

イシュトは警戒心を抱きつつ、尋ねた。

脳裡に宮廷女官たちの高笑いがかかります。第一印象は折り目正しいが、この女も、もしかしたらイシュトの貞操を狙っているのかもしれない——。

「はい? なんのことだか、よくわかりませんが……」

エルシィは怪訝そうに首をかしげると、あっさりとスルーした。

「わたくしの任務は、イシュトさんの各種サポートです。イシュトさんは、いろんな意味で規格外といえますか、異例尽くしの大型新人さんですので、わたくしが責任を持ってサポートさせていただきます」

どうやら、宮廷女官とはタイプの異なる職種らしい。

イシュトは安堵したが、いよいよ「冒険者」という仕事が目の前に迫ってきた気がして、憂鬱になった。

「冒険者か……」

「なにか、ご不安でも？」

「いや。本音をいえば、あまり気が進まんな」

「そうなんですか？」

エルシイは小首をかしげた。

「ですが、イシュトさんの情報は冒険者ギルドに登録済みですし、王立冒険者養成校の校長先生からは、熱烈な推薦状もいただいています。しかも、あの白騎士——アイリスフラウさんが、イシュトさんの後見人を買ってでられたんですね。冒険者ギルドでも評判になってますよ」

「ぐぬぬ……」

「そもそも、あれだけの戦闘力をお持ちなのに、冒険者にならないのはもったいないです。もちろん、正規の騎士団に入るとい選択肢もあります。アイリスフラウさんの推薦があれば、審査は余裕でパスできるでしょうし」

「軍隊組織に興味はないな。いや、ないこともないが、俺は軍隊に入る側ではなく、軍を動かす側なのだな」

「動かす？ つまり、将来的には軍師をご希望ということでしょうか？」

「いや、そう意味では……」

どうにも話が噛み合わない。

「とにかく、イシュトさんは冒険者にむいていると思いますよ」

エルシイは完璧ともいえる笑みを浮かべた。

「……！」

その美しさに、イシュトは息を呑んでしまった。

良くも悪くも貪欲で、己の欲望に忠実な魔族の女たちとは大違いだ。

結局、その清楚な笑顔に釣りこまれたかのように、イシュトは承諾してしまった。

「いいだろう。一度決めたことだ、やってやる」

「その意気です。ところで……イシュトさん？」

と、エルシイが頬を赤らめながら、遠慮がちにいった。

「なんだ？」

「いい加減、服を着てもらえると……ありがたいですけど。その……目のやり場に困るといいますか」

「……!？」

自分の身体を見下ろすなり、イシュトは赤面してしまった。

下着一枚という、あられない格好をしていたのだ。寝間着がなかったので、昨夜は半裸で床に就いたのである。

「さっ、先にいわんか!」

「すみません! イシュトさんなりのジョークか、あるいは民族的な風習かとも考えられましたが、なかなかいいだしづらくて……」

エルシイは頬を赤らめている。

「もうよい。悪気がないのはわかった」

イシュトは納得すると、エルシイの正面に立った。

「ほら、早くしろ」

「はい?」

一瞬、エルシイはきよとしたが、やがて事情を納得したらしく、ハンガーに掛けてあった衣服を手を取った。そして、イシュトに着せ始める。

やがて、イシュトは木綿の服の上下と、レザーシューズを身に着けた。

「うむ。大義であつた」

イシュトが大真面目にねぎらうと、なぜだかエルシイはくすりと微笑んだ。

「イシュトさんって、意外に甘えん坊さんですね。ちよっと、びっくりです」

「ん? どういうことだ?」

「今回は特別サービスということで、お手伝いしましたけど。次からは、ちゃんと自分でお着替えしないと——ダメだぞ?」

急にお姉さんぶって、エルシイはイシュトの鼻先をつんと突つついた。

ここに至り、ようやくイシュトは失態を悟った。

「うわあああああつ! 違う! 違うぞエルシイ! いまのは、その……つい昔の癖が出てしまったのだ! お前に甘えたかったわけではない!」

羞恥心が最高潮に達したイシュトは、ベッドにダイブした。頭から毛布を引っかぶってしまつた。

「ふふつ。恥ずかしがるイシュトさんって、とっても可愛らしいですね」

「頼むから、忘れてくれ……」

前世では、常に召使いの手を借りながら着替えをしたものだが、決してイシュトが望んだわけではない。魔王城では、そういう決まりだったのである。

もちろん、異世界で生まれ変わった現在、自分一人を着替えねばならない。そんなことは百も承知だったはずなのに——起き抜けにエルシイが顔を出したせいで、ついつい召使いのようになつてしまった。

習慣とは恐ろしいものだ……と、イシュトは痛感した。

そもそも、エルシイだって人が悪い。

即座に拒否してくればよかったものを、悪乗りしすぎである。とはいえ、お姉さんぶってイシュトの鼻先をついたエルシイには、新鮮な魅力があった。

危うく、新たな性癖が目覚めるところだった……と、イシュトは思った。

## 3

その後、イシュトはエルシイに連れられて、冒険者ギルド王都支部を訪れた。

「こちらです、イシュトさん」

エルシイが案内したのは、一階フロアの大半を占める食堂だった。

席に着いているのは、冒険者ばかりである。年齢や性別、武装、そして種族もばらばらな者たちが、同じ食堂の飯を食べている。

この連中のなかから、いずれ勇者が誕生するのかもしれない……と思うと、いまのうちに倒してやろうかとも思ったが、さすがに自重する。

「とりあえず、座りましょうか」

エルシイの提案で、適当な空席に腰を下ろした。

フロアには珈琲の芳香が漂っている。

「……………」

イシュトは強烈な食欲を覚えた。だが、所持金がない。かといって、エルシイに「飯を食わせろ」と命じるのも、なんだか体裁が悪い。

「……いや、ちよつと待てよ？」

ふと、イシュトは眉をひそめた。

「エルシイ。聞きたいことがある」

「はい、なんでしよう？」

打てば響くように、エルシイは笑顔で応じた。

「俺はすでに、アース・ドラゴンの最上位種を一匹と、レッドワームを百匹以上、さらにはキングワームを一匹、討伐している。目撃証言もあるはずだ」

「はい、ギルドでも確認しています」

「その報酬は、ないのか？」

「あ、その件についてですが……」

エルシイは申し訳なさそうな顔をした。

「実は、イシュトさんがモンスターを討伐された時点では、まだ冒険者として正式に登録されていませんでしたので、報酬はお支払いできないんです。規則ですので……」

「融通が利かんものだな」

イシュトは嘆息したが、かつて一国を統治していた身なので、事情は理解できた。国家だろ



うが民間組織だろうが、規律は重要である。

「ですが、ギルドの職員一同、イシュトさんのご活躍には心から感謝しています。イシュトさんが安定した収入を得られるようになるまで、生活面でのサポートは惜しみませんので、困ったことがありましたら、なんでもお申しつけください。そういうえば——朝ご飯、まだでしたよね？」

エルシイはにつこりすると、メニユーを差し出した。

「どうぞ。好きなものを、なんでも注文してくださいね」

「いつておくが、俺は無一文だぞ？」

念のため、イシュトは確認した。

「もちろん、ギルドが受け持ちますので」

「うむ。それでは遠慮なく——」

イシュトはメニユーを開くと、目を爛々と光らせた。

「ふう……こんなに食べたのは久しぶりのような気がする。美味であつたぞ」

イシュトは満腹を抱えつつ、食後の珈琲を堪能していた。

目の前には、大量の皿を山のように積みあげている。

異世界で暮らすにおいて、食事が合わなければ一大事だと思っていたが、その心配はなさそ

うだ。魔王城の料理も悪くはなかったが、この世界の庶民料理のほうが、よほど美味いし、胃にも優しい。

それにしても、ふしぎだと思った。前世のイシュトは魔族の頂点に君臨する王であり、その地位にふさわしい巨軀を誇っていた。

そんな自分が、細身のヒューマンに生まれ変わったのだ。正確に測ったわけではないが、体重は三分の一ほどに減ったはずだ。となれば、食事も大幅に減るべきだろう。

ところが、むしろ前世の自分よりも、いまの自分のほうが、食欲旺盛なのである。昨夜は木賃宿で質素な飯を食わされたので、その反動だろうか。

いや——だとしても、この食欲は異常だと思った。

ふと、エルシイの視線を感じた。

「どうかしたのか？」

「いえ。イシュトさんが食事をされている姿に、圧倒されてしまいました……」

皮肉かとも思ったが、エルシイは本当に感嘆している様子だった。

「いや、なんというか……ひとたび食べ始めたら、止まらなくなってしまうってな」

イシュトは赤面した。

「ふふつ。とっても気持ちいい食べっぷりでしたよ。男の人って感じがしました」

エルシイはにつこり笑うと、ずっと手元に置いていた書類を差し出した。

「なんだ、これは？」

「イシュトさんの基本情報です。誤記がありましたら、すぐに修正しますので、いますぐ確認をお願いできますか？」

イシュトが食事をしている間、エルシイがずっと付き合ってくれた理由が、ようやく判明した。まだ仕事が残っていたらしい。

「なんだ。食事中でも確認できたのだから」

「ものすごく熱心な様子でしたので、声をかけるのは野暮かと思ったんです」

「そんな気遣いは無用だ」

イシュトはぶつさらばうに返すと、書類の確認を始めた。

冒険者名	イシュト
本名	イシュヴァルト・アースレイ
生年月日	大陸暦九八一年 冥府の月（閏四月） 十三日
年齢	十八歳
職業	見習騎士
出身地	レハール王国 北部未開拓地域
パーティー	未定

……といった感じで、イシュトの基本情報がずらりと羅列されている。

「おい、エルシイ。この生年月日と年齢だが、明らかに詐称だぞ？」

イシュトが指摘すると、エルシイは苦笑まじりに答えた。

「その点につきましては、イシュトさんの過去に曖昧な点が多いので、ギルドのほうで便宜的に設定させていただきました。冒険者を目指すような人は、いろいろと複雑な事情を抱えている場合も多いので、珍しいことではないんです」

「ふむ、そういうわけか」

そもそも、イシュトの正式な生年月日を記述しようと思ったたら、まずは前世における暦から説明しなければならぬ。「暗黒暦」などといわれたところで、この世界の人々は首をかしげてしまっただろう。

「嘘も方便というわけだな。まあ、よからう。ところで、俺の出身地だが……この北部未開拓地域というのは、なんのことだ？」

「そちらにつきましても、素性を明かされたくない人や、出身地を知られたくない人が少なくありませんので、便宜的に『北部未開拓地域』としてあるんです。あまり深い意味はありませんので、お気になさらず。ちなみに、イシュトさんが保護されたバルディオス神殿塔が建っているあたりが、まさしく北部未開拓地域となります」

「ならば、あなたが嘘というわけでもないな」  
 イシュトが降臨した地点が「北部未開拓地域」に含まれるというのなら、ある意味、出身地といえなくもないだろう。イシュトは納得した。

二枚目は身体測定の結果で、主に身長や体重などのデータが記録されている。  
 三枚目に差しかつたとき、イシュトはびくりと眉を反応させた。

冒険者レベル、体力や魔力、攻撃力や防御力……等々、物差しでは測れないような要素までが、いちいち数値化されているのだ。運だのアラインメントだといった、曖昧な要素も例外ではない。

余計なお世話だな……と思ったイシュトは、ふと違和感を覚えた。

「おい、エルシイ。お前たちの世界では物を数えるとき、いちいち0から数えるのか？」

「いえ、普通は1から始めますけど」

「ならば、どうして俺の冒険者レベルは0になっている？ 1なら理解できるが」

エルシイは苦笑した。

「実は、当ギルドでも話題になっていたのですが……レベル0という解析結果は前代未聞なんです。ちなみに、イシュトさんの各能力値は、すべて上限に達しています」

「それはもう、伸び代がないということか？」

イシュトは眉をひそめた。

「いえ。それ以上は解析できないという、魔道士側の問題です。今後、イシュトさんが成長できない——というわけではないと思います」

「ふむ。ある程度の強さを超えると、測定不能になるというだけか。それなら問題はないが……ところで、このスキル欄はなんだ？ 文字がまったく読み取れんぞ」

エルシイは再び苦笑した。

「イシュトさんの場合、身に着けているスキルが多すぎたり、意味不明だったりで、文字情報として上手く表現できなかったようです。これまた前代未聞だそうですよ」

「そうか……まあいい。俺自身にどんなスキルがそなわっているのか、自分で調べてみるのも一興だ」

イシュトは会心の笑みを浮かべると、書類から顔を上げた。

「うむ、すべて確認した。これで問題ないぞ」

「ありがとうございます」

エルシイはにっこり笑うと、書類を受け取った。

そして、今度はカードのようなものを差し出した。

「なんだ、それは？」

「こちらが、イシュトさんの冒険者証になります」



『レベル0の魔王様、異世界で冒険者を始めます  
史上最強の新人が誕生しました』の  
試読版はここまでです。

お読みいただきましてありがとうございます。  
続きは8月10日頃発売の製品版でお楽しみください！

※この試読版は製作中のものであり、製品版と一部異なる場合があります。

「ふむ……」

イシュトは冒険者証を手にとった。表面には魔法陣のような紋様が、裏面にはイシュトの名前と番号、そして冒険者ギルドの紋章が刻まれている。

「ふしぎな材質だな。紙のように薄いくせに、石や金属のように頑丈だ」

「素材はレアメタルの一種です。ちよつとやそつとの衝撃で壊れることはありませんから、ご安心ください。それと、このカードにはイシュトさんの情報が記録されています。イシュトさんの成長に合わせて、情報も更新されていく仕組みになっています。いわば、魔導具の一種ですね」

「ほう、大したものだな」

イシュトは感心した。やはり魔法文明に限っていえば、この異世界のほうが、前世よりも格段に進んでいるようだ。

かくして、イシュトは冒険者証を受領した。

前代未聞——レベル0の新米冒険者が誕生した瞬間であった。

それがなにを意味するのかは、まだ誰も知らない……。